Title	上海図書館蔵宋元版解題：史部(一)
Sub Title	Bibliographical notes to the Sung Yuan editions in the Shanghai library : histories (1)
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1996
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.31 (1996.) ,p.1- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平澤五郎教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

上海図書館蔵宋元版解題 史部（一）

尾崎 康

例言

一 この稿は、上海図書館所蔵の宋元版のうち、史部に属する本を網羅的に著録するもので、今回は正史類を取上げる。この調査は一九八七年初夏、九一年初冬、九五年盛夏に行われた。

一 調査は基本的に『上海図書館善本書目』（上海図書館編 一九五七年刊）に拠り、その後の収蔵書については『中国古籍善本書目』史部（中国古籍善本書目編輯委員会編 上海古籍出版社 一九九一年刊）から採録し、さらに特に許されて未刊の同図書館の善本目録稿を参照した。

一 右の目録に宋・元版とされている本は、明版と審定されたものも原則的に取上げた。

一 十七史の各版について、先に正史宋元版の研究（文中に前著と略称）に述べたから、一般的な記述はこれに委ねて省いた。ただし、記事によつてはかなり重複させたところもある。

一 上海図書館の蔵印には、「上海／図書／館蔵」「上海／書館／蔵書」「上海／書館／蔵書」の三種があつて、それぞれに捺されているが、ここにはその別を明らかにすることなく、すべて省略した。

史記存三〇卷（卷五・六・八―一二・一六・一七・三四

―四〇・四八―五四・五六・九九・一〇〇・一〇七）

一一〇）漢司馬遷撰 南朝宋裴駟集解〔南宋初期〕

淮南西路轉運司刊

一七冊

後補濃紺色表紙（二九・五×二一・五_チセ_ン）、金鑲玉裝（紙高

二八_チセ_ン）。本文は一六冊、第一七冊は清末民国初の名家の校勘

記・題識の類を収める。

第一冊卷五秦本紀の首半葉は欠。この第一葉裏は、左右双辺

（二二・四×一七・七_チセ_ン）、九行、一六字・注文小字双行二〇

―二二字。版心 白口、単黒魚尾、「史記五」と題し、丁付、

その下に刻工名があるが、この巻の版心は故意に傷つけられた

らしくみえるものが多い。第二冊卷六首半葉も下半が欠けるが、

第三冊以下、大題を下に、小題を上刻する。中国版刻図録一

〇七は、そのため卷八首半葉の書影を掲げる。

卷六は存二七葉、秦始皇本紀の始皇帝紀の末で終わっていて、

二世皇帝紀と太史公曰の一〇数集を欠く。さらに卷九第二葉、

卷三四第八葉、卷三八第二葉、卷一〇一第一九葉以下、卷一一

一第一九葉以下が欠葉である。

卷一一一の匈奴列伝は「於是制詔御史曰匈奴」で終わっている

から、ここも一〇葉余が欠けているが、本来はこの末に「校対

無爲軍軍学教授潘旦／監雕淮南路轉運司幹弁公事石蒙正」の二

行があったはずである。この兩名の官銜は、この他に卷二一建

元已来王子侯者年表（中国版刻図録解説による、あるいは卷二

〇建元以来侯者年表か）、卷二六曆書、卷八七李斯列伝、卷九

五樊鄴滕灌列伝、卷一二六滑稽列伝の各巻末にもあるはずであ

るが、いずれも欠巻であるために、この本にはまったくみられ

ない。しかしこの列銜が北京図書館の劉氏嘉業堂と潘氏宝礼堂

旧蔵本にあり、これらと容齋統筆卷一四の記事とによって、南

宋初期（紹興中）淮南西路轉運司刊本であることになる。

避諱欠筆は、玄弦 敬驚竟境 弘殷胤 貞徵 樹豎 讓 頊 姁

桓垣完丸 獮 獮の各字に行われている。構購は末五画の冉の中

央の縦画がないが、これは直ちに欠画とはみられず、小字双行

の「淵聖」（桓）^{今上}（構）の避諱の例もなく、また慎字はまっ

たく欠かない。刻工名は左に表示する。

4 王先文 王祐 王華 5 丘旬 6 仲良 7 宋寔 李秀

8 屈旻 林選 9 兪尚 施光 10 孫彦 11 張宗 張真

戚聰旺 章叟 陳用 陳德 陳真 陳震 陳權

12 華再興 閔孝中¹³ 楊安 楊守道 楊謹¹⁴ 翟榮 趙明

16 盧鑑¹⁸ 載祐 魏俊²¹ 顧昭 顧真

すでに南宋初期（紹興中）刊であることが明らかであるが、これをこの刻工について他の同期の刊本と比較して証すると、次のようになる。

臨川先生文集 宋紹興二一年序刊 丘甸 屈旻

漢書 南宋初期兩淮江東轉運司刊 陳真

後漢書 南宋初期兩淮江東轉運司刊

丘甸 李秀 屈旻 孫彦 張宗 陳用 章旼

五代史記 南宋初期刊 陳用

通典 南宋初期刊 章旼

增廣司馬溫公全集 南宋初期刊 林選 施光

新雕重校戰國策 南宋初期刊 李秀

孔氏六帖 宋乾道二年泉州南郡庠刊 李秀

東坡集 宋乾道九年序刊 章旼

文選 宋淳熙八年貴池尤袤刊 張宗

文選 南宋前期贛州刊 陳真 陳權

（南北朝七史） 南宋前期浙刊 王華

豫章黃先生文集 南宋前期刊 張宗

錢氏小兒藥章直訣 南宋前期刊 施光

周易注疏 南宋前期 兩浙東路茶塩司刊 李秀

周礼疏 南宋前期 兩浙東路茶塩司刊 陳用

礼記正義 宋紹熙三年兩浙東路茶塩司刊 王祐 陳真 陳權

論語註疏解經 南宋中期兩浙東路茶塩司刊 王祐

孟子註疏解經 南宋中期兩浙東路茶塩司刊 王祐

同じ叢刻の兩漢書の刻工と合うのは当然で、兩漢書が一度は桓を淵聖御名、構を今上御名と刻し、それに入木して欠画に改めていることもあつて、紹興年間後半の刊となろう。

卷一二、三五、一一〇末（全冊末）等に清後期の莫友芝、単学伝、徐渭仁、そして民国初の康有爲の手識があるが、古い順に掲げる。

「宋刊大字本史記十行十六字裝／駟集解字体撲實渾健兼于／整齊中見嫉媚之致有以当楮／虞顔柳一輩人法書臨摹無／不可也苟非冥中有神物護／持安得流伝完好至今日乎披／是編者当具衣冠再拜焚無上／妙香以供奉之」

道光辛卯単学伝書於拜詩閣「単学傳印」（陰）「師白」
（道光二一年・一八四一）（卷三五末）

「右孟蜀大字史記三十卷向爲琴川／張氏当湖胡氏所藏今歸吾友

郁君／泰峰宜稼堂挿架泰峰好藏書尤／究心於宋元古刻年來大

(民國四年・一九一五) (卷五〇(第一四冊)首副紙)

江南北浙東西／故家往々以秘籍來不惜重資購之故所／得最多而最佳不下百數十種皆絕無／僅有者咸豐癸丑八月邑中猝然大

堂々たる大字本であるだけに、各代の所藏者や借読者の名が列ねられているが、さらにこれを蔵書印が詳しく示す。

乱泰峰／以先兄靈柩在寢揮子姪出門已身死／守不去余則丁眷

まず明代では、「吳／寛」「原／博」「吳寛・一四三五―一五〇四」、「停雲」(楮)(文壁(証明)・一四七〇―一五五七)、「肇

衆多倉皇無措施／遭禁繫着翅難飛我兩人逼勒無余／頽於死者

錫／余以／嘉之」(次子文嘉・一五〇一―一八三)、「韓世／能印」

數矣地方則排門比戸搜括／蓋藏書籍故紙狼藉衢路輔之善堂／

(韓世能・一五六八進士)の諸印がある。やや途絶えて清代に

設局收買每斤二文每日焚之其中成冊／者略爲檢出然率皆破碎

「錢印／維城」(陰)「稼軒」(錢維城・一七二〇―一七二二)、そして

斷爛嗚呼書籍／之劫慘酷至於如此之極泰峰物聚所収／困於艱

おそらく道光年間に張容鏡・姚畹真(一八〇三)夫妻の所有

疏歸然獨無擾害然來日茫々不／知天定如何右非文字因緣鬼神

に帰してから、単学伝や方若衡(方維甸の女)に供覧したのを

呵護其／能終始保全者太平也

甲寅十一月八日借読記
徐渭仁書於信天巢

はじめ、郁松年が徐渭仁や莫友芝に、甘翰臣が熊会貞や楊守敬

「渭仁」
「借観」

にみせたうえに一部を康有爲に呈したらしく、次のような印が

(咸豐四年・一八五四) (卷二一〇末)

続く。「小瑯嬛／福地／秘笈」「芙初女／士姚畹／真印」、「方氏

「同治乙丑独山莫友芝子偃借読過」「莫友芝」
「圖書記」

若／衡曾観」(陰)「若衡」「勤襄／公五女」(陰)、「単学／伝印」

(同治四年・一八六五) (卷二二末)

「師白」、「当湖小重山館／胡氏邃江珍藏」(胡惠墉・一八二一)

「蜀大字本史記一冊／甘翰臣購入于上海郁泰峯凡殘／本三十写

五二)、「郁印／松年」(陰)「泰峰／審定」「泰／峰」、「莫友芝／

翰臣以比冊三写贈余実希／世之宝也則刻鏤既精紙墨皆佳妙／

「説劍／堂印」「独立／

古香古色触手如新宜永宝藏之」(低格)乙卯二月三日 康有

「子孫／保之」、「田耕／堂藏」、「南海康／有

爲藏于／(同)万木草堂題記「康有爲」／楊守敬校此書謂多避宋

山人」(潘飛声)、「王氏／子裕」、「秘／峽」「帰／首」「地／山」「子孫

諱至高宗構字／当是高宗時刻未審然否就果然亦至可珍」

爲更／之珍藏」、「真宋刊」

／保之」等。

第一七冊にあたる別冊には、まず扉に「宋大字史／記集解／乙卯二月南海康有為題」と、「宋蜀大字／史記集解／壬子三月懋吾題(印)」(楊守敬印)の二題がある。そして本文には民国に入るころからの熊会貞、楊守敬、康有為の題記、校勘記の類が次のように書かれてある。

「南宋大字史記集解殘本札記

史記文字自晉徐広作音義已多異同其注之伝於今者以裴駟／集解爲最古至索隱正義出合刻本盛行於世然其學不能望／裴氏項背而集解單行宋本今皆殘欠惟明毛氏汲古閣刻有全書／近日金陵重刊集解則參合各本不尽毛氏之旧此爲南宋初大／字本集解存三十九(「九」字に抹消の印を付す)卷以毛本照之亦多參差乃爲之札記其勝於／各本者皆出之有各本得失錯出而此本是者亦出之又有各本不／誤而此本獨誤者亦出之至与各本同誤此已詳金陵刻本札記故／欠焉不录以省煩瀆壬子春枝江熊会貞記於上海虹口旅次

秦本紀第五

集解地理志臨淮

日本或作地理志曰按集解前後引地理志皆無日字則比無日字是也

榮邑之／毛本榮上有即字此脫

臣子与往／中統王柯凌諸本並作臣与此合毛本作吾非也
晋人辺邑也／人毛本作之

悼公一年／一爲二誤挽年表齊田乞弒君孺子当悼公二年
十一年城籍姑／挽年表十年城籍姑其年靈公即卒則此衍一字毛作十三年亦誤

(以上第一葉 以下略 全一五葉)

「南宋蜀大字史記集解殘本三十卷

旧爲上海郁泰峰所藏有徐渭仁題爲／孟蜀本渭仁蓋習聞孟蜀有
大字本不／考此本避諱至南宋高宗止今通檢一／過凡匡桓禎項
恒(いづれも未画を欠いた形で記す)皆欠筆書中不見／高宗諱而購構皆欠筆避
嫌名也孝／宋諱脊字則不欠筆足知此本的爲／高宗時所刊雕鏤
之精楮墨之美少／有倫匹不知何以殘欠乃亦大抵宋代／刻書以
蜀本字爲最大蓋沿于孟蜀／之刻五經以余所見杭建汴贛鄂亦間
／有大字者而要不知此本之持出題爲／蜀本亦未爲過乃囑門人
熊固芝会貞／以毛本及各本校之殊多異同此本訛／誤之字亦不
少者邢子才謂曰思誤者／亦是一適知古人矜慎不肯便下雌黃／
東坡傷文選之妄改以不誤爲誤知此／弊北宋已然至明代則逞臆
尤甚故近時／顧千里創爲以不校校之之說雖明知其／誤亦不輕

改以待学者之研求誠刻書者之善法而読書者之良規也憶余在日本／初晤森立之著有經籍訪古志以古刻書相質余／謬言此書訛誤滿紙雖古刻未爲奇也／立之艷然曰君於古書未也書無訛字尚／何足貴乎余乃相視而笑以立之爲／知言今香山甘君翰臣以重價購此書／警然一瞬不以殘欠爲嫌知其別有會／心与世俗侈爲玩者異也独惜余觀／海堂藏書至今尚未能携出不得与／翰臣共賞也壬子四月鄰蘇老人書／於上海虹口寓廬時年七十有四

「世所伝蜀大字本史記誤也／自毛子晋輩已言之然蜀只／刻五經無史記世以大字本皆／誤婦之蜀耳此本既經楊惺／吾拗宋諱定爲孝宗時刻則／非蜀本矣惺翁尚徇俗說題／爲南宋蜀大字本似爲不詞但／直称爲南宋本可宝知矣且其／刊写之精紙墨之雅古香古色／玩之無斃實爲希世之宝何／必蜀甘君翰臣得殘本三十写／于郁泰峰家分一冊贈余／翰臣之遇厚余也吾珍若拱璧／而慮人不知此世写之又欠或不知／其何往也題記以貽後之好事且／記翰臣之德非殘本也吾敢不受也 乙卯二月南海康有爲／

第一頁第五行孝字誤当而高

以上のように、それぞれに蜀大字本の可否、欠画およびそれによる刊期の推定、伝来（旧蔵者）さらには雄渾な字様などに触れているが、結果はいずれもすでに整理して述べた通りであ

る。熊会貞による校勘の結果は、全一五葉と長文にわたるために、十分に移録して検討することができないままであり、史記の専家に詳細な考究を委ねたい。私としては、南宋初期（紹興中）に急を要して両浙東路茶塩司を中心に北宋版の覆刻が続いたあとに、紹興末からおそらくこの両淮江東転運司刊三史をはじめとして、また両浙東路茶塩司のいわゆる越刊八行本注疏などから、ようやく国子監の主導で校訂刊刻が行われるようになったと推定しているから、この史記の本文になんらかの特徴がみられようかと期待している。安平秋氏が《史記》版本述要（古籍整理与研究 総二期 一九八七年）に他本との正誤の各二例を挙げられるが、例が少しいし、賀次君氏の史記書録は北京図書館現蔵の同版本を、水沢利忠氏の史記会注考証校補はそれを劉氏嘉業堂が摹刻した本を用いて一部を校勘しているが、これには元明の修補が入った本であるから、熊氏の労は見直されてよからう。そして、北宋本（杏雨書屋蔵）、その覆刻本（北京図書館蔵）、いわゆる景祐刊本などの北宋版系統の本と、後の南宋刊の集解本、さらには二注本、三注本等（それが汲古閣本に繋がる）との間にあって、特異な存在にあると思われるからである。

この題識の類は、一九八七年に李慶・高橋智氏の協力を得て移写し

であったが、時間に限りがあつて不明のままに残された字も多く、とくに単学伝と康有爲のものは正しく写し取ることのできないところも少くなかつた。今回（九五年）陳先行氏は原文に当り直し、同僚諸氏とも検討して、右のように読んでくださった。読解には 任光亮、張善信氏や善本特蔵部の諸氏、また陳捷氏も協力された。さらに文中にこれと同版本の模刻本が呉興劉氏嘉業堂で刊行された（一九一九年刊）ことに触れたが、今回の調査中に三浦理一郎氏の尽力によって湖州南濤の同蔵書楼を訪ね、宋四史齋にこの版木等が陳列されているのを見た。

同 零本（存卷三一・三二） 南朝宋裴駰集解 唐司

馬貞索隱 蒙古中統二年（一二六一） 段子成刊 一冊

新補濃紫色表紙（二四・八×一五・五センチ）、襖装。

本文首題「呉太伯世家第一」（索隱小字）／（同一六字）（隔格） 史記三十一」。

双辺（一九・一×一二・四センチ）、一四行、二五字・注文小字

双行。版心 線黒口または白口、題「史世卅一（三）」、双黒魚尾、上象鼻に字数、下象鼻の丁付の下に刻工名の入った葉がある。刻工名は卷三二の多くが吉、三二にはない。耳題が「呉世

家」「齊世家桓公」のように刻され、ときに格で囲まれた場合もある。

尾題は「齊太公世家第二」。

蔵印は「□討／司馬」。

中国古籍善本書目によれば、重慶市図書館にこの完本があるという。北京図書館蔵の二部はそれぞれ三卷、一四卷を別版によつて補配され、前著に記したように台北の中央研究院歴史語言研究所蔵本には明代の修補がある。わが国にも靜嘉堂文庫に明修の残九二卷があるが、本版は思ひのほか稀覯のようである。

又 零本（存卷一二九） 一冊

後補紺色表紙（二三・七×一七・七センチ）、金鑲玉装（料紙高

さ二四・三センチ）。

副紙の中央に「殘元槧本史記一卷南陵徐氏蔵（印）」（印文は「徐乃／昌印」と題し、その左に「全書前有中統二年校理董浦序按元世祖中統二年爲／宋理宗景定二年此本雖署元号実則宋刻也」と識す。

也」と識す。

本文首題「貨殖列伝第六十九」（索隱小字）／（同三字）（隔格） 史記一百二十九」。

双辺（一八・九×一二・三センチ）。版心の題は「列（史列伝・列伝）百廿九」とみえるが、破損した葉が多い。

全一〇葉。尾題「貨殖列伝第六十九」。

蔵印「潜廬」（金蓉鏡一八五六―一九二八か）、「闇伯／□□」、
「積学齋徐乃昌蔵書」（一八六八―一九三六）。

同 零卷（存卷八（第二四葉以下欠） 南朝宋裴駟集解

唐司馬貞素隱 張守節正義 「宋紹熙」建安黃善夫刊

一冊

後補薄藍色表紙（二六・四×一五・五センチ）、金鑲玉装（料紙
高さ二四・七センチ）。

本文首題「高祖本紀第八（隔五格）史記八」。

左右双辺（一九・八×一二・四センチ）、一〇行、一八字・注文

小字双行二三字。版心 線黒口、双黒魚尾、上象鼻に大小字数、

題「史高祖八（丁付）」。全四〇葉のうち、存首二三葉、欠一
七葉。

建安黃善夫刊本は三史ともに、狩谷掖齋求古樓旧蔵本と上杉
本（歴史民族博物館現蔵）が知られているが、他に現存本は意
外に少い。一史ずつでもほぼ首尾完好本は北京大学図書館の両

漢書ぐらいであろうか。零本さえ珍しく、これは史記のその一
である。

求古樓本と上杉本とは印行の時期が同じではなく、両漢書の
目録等に相違があるように（求古樓本の漢書は松本市立図書館、
後漢書は天理図書館現蔵）、刊記・目録等に差異があつて、求
古樓本系が先行し、上杉本系はその一部を直後に補修したもの
らしい。

しかし、このような端本ではそれはわからない。後修の上杉
本もそうであるが、墨色は濃くてとても後印本と思えず、黄
（劉）刊本全体、さらには建刊十史すべて印本の数がよほど少
かったのではないかと推定される。

漢書残本（存卷五二―七三） 漢班固撰 唐顏師古注

〔南宋後半期〕福唐郡庠刊 元大徳・元統（元末・明）

通修 一〇冊

後補金切箔散暗紫色絹表紙（三一・六×一九・一センチ）、金鑲
玉装（料紙高さ二七・四センチ）。

本文首題「竇田灌韓伝第二十二（隔二格）班固 漢書五十二／
（低五格）秘書監上護軍琅邪県開国子顔 師古 注」。

左右双辺（二二×一四・二_チ）、一〇行、一九字・注文小字
双行二七〇八字。版心 白口、双黒魚尾、首葉の題「前漢伝二
十二（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に「元統二年刊
中」のように補刊年記と刻工名が刻される。元末と明前期ごろ
の修葉に粗黒口のものがあり、これらは概して彫り刷りとも粗
く汚く、墨釘の箇所が目につく。

原刻と思われる葉も少ないながら残り、張榮 鄭堇の刻工名が
みえるものがそうであろう。大徳八・九年の補刻刻工が、又足
子尤 子高 子通 王文 王敦 文震 禾甫 正人 仲和
江亨 君甫 洪進 益山 劉震卿 震卿 徳忠。元統二年の修
工は余安卿のほかは単字、なかに元統六年の年記があるが、元
統は二年までであり、誤刻であろう。

粗黒口の明前期ごろの修葉は、版心の上下象鼻の右半が剝去
されているが、この版には宣徳九・一〇年（一四三四・五）、
正統六・八年（一四四一・三）年の補刊年記と版下抄手や刻工
名があるから、おそらくこの時期のもので、そのしばらく後の
印であろうと思われる。

補刻葉であるが、敬驚 徵 完の字の末面を欠く。
卷六一第四葉、卷六六第一七・一八葉は補写。

尾題は「韋賢伝第四十三卷 大字六千七百五十四字
小字四千一百七十七字」とあり、明修
葉である。

同 一〇〇卷 元大徳九年（一三〇五） 太平路儒学刊
〔元末明初・明成化・弘治・嘉靖以前〕 逯修（卷五
三〇七一補写） 一〇四冊

後補銀切箔散黄土色表紙（二七×一八・二_チ）、襖装。
「太平路学新刊班固漢書」の叙例は首二葉が補写、続く前漢
書目録は刻であるが、大徳九年太平路儒学孔文声の刊語、劉遵
と伯都の列銜はその末葉の余白に補写されている。

本文首題「高帝紀第一上（師古注小字
双行一八字）班固漢書一（低
三格）
正義大夫行秘書少監琅邪県開国子顔 師古 注」。

双辺（二二・一×一五・七_チ）、一〇行、二二字・注文小字
双行。版心 線黒口、三黒魚尾、題は「前漢紀一上」のように
あり、上象鼻左に大小字数、下象鼻に刻工名を刻する。

明修葉は上象鼻右の補刊年記や下象鼻の一部を剝去してある
が、年記としては唯一、「成化十八年 監生何清」があり、下
象鼻にもごく稀に刻工名を残したところがある。削去された葉
の大半はこれと同じ成化一八年のものと思われ、一部は字様か

ら弘治二・三年（一四八九・九〇）、さらに下象鼻に「区」^肖「刈訓易」の字の残る葉などはそれより降るころのものともみられる。ただし嘉靖に至るものではない。

台北の中央図書館本は残本であったから、ここに刻工名がだ**いぶ**増えている。ただ、そこで元末明初修とした葵仁は原刻と見直した。さらにもう一期の明修があるようである。

3 大友 子和 4 王介 王文 王文貴 王名祐 王祥 5 正甫

正宝 石山 7 何子敬 李祐 8 周宝 金大興 9 信甫 信卿

俞榮 10 徐進 翁子和 翁勝之 11 古杭張成 張益 張益之

進卿 宝葵陳正甫 陳実甫 12 葵仁 葵陳 敬之 勝之

董童 14 采甫 15 劉訓 新安趙瓊甫 16 寿甫 錢洪之（以上原刻）

張伯上 張伯灃 張清之 章良之（以上元末明初修）

文貴 可愛 何受 李弼 周紀 周紀実 万満里

（以上明前期修）

補写は卷五三〜七一の一九卷のほか、卷二下第二二葉、卷二〇第一四葉、卷二八上第二九葉、卷三一第二二葉、卷九七上第二〇葉、卷一〇〇上第六葉。また卷六九第一・二葉が欠葉。

「恩福堂／藏書印」、「新安／汪氏」「啓淑／信印」^陰（汪啓淑・

一七二八〜九九）、「晋陵唐氏珍／藏經史凶書」、「葦身／殿大／

学士」と判読不明印^{（二字陰）}、「兩耳不聞／窓外事／弑心惟読／聖賢書」、以上の六印は後掲の元大徳寧国路儒学刊の後漢書（一六〇頁）のものと共通する。他に「錢唐／嚴杰／借覽」^陰、「韓氏凶籍／伝賢子と孫と」、「子材／鑿賞」^陰印。

又 残本（存卷六六〜六九）至〔明弘治〕通修

二冊

後補金切箔散黄色表紙（二八×一八・六^チセ）、襖装。題簽

「宋版漢書列伝」^{第 四 五 冊}。

「公孫劉田王楊蔡陳鄭伝第三十六」^{（隔 二 格）}漢書六十六／^{（低 二 格）}

正義大夫行秘書少監琅邪県開国子顔 師古注。

双辺（二二・二×一五・三^チセ）、一〇行、一二字・注文小字

双行。版心 線黒口、双黒魚尾、題「前漢伝三十六（丁付）。

補刻は明の成化・弘治に及ぶと思われる。

蔵印は副紙に大きく「五福五代／堂古稀／天子之宝」「八徴／耄念／之宝」「太上／皇帝／之宝」の三璽印。本文にも「乾隆／御覧／之宝」^{（楠 円）}「天禄／繼鑑」^陰の二印があるが天禄

琳琅書目に未著録。他に「晋府／凶書／之印」「子と孫と／永

宝用」^{（明朱鐘鉉）}、「高世異／凶書印」、「華陽／国士珍／秘之

印、「鑄閔江／大経□／潔百氏」の各印。乾隆帝や晋府の印を捺すわりには善いとも思えぬ零本である。

後漢書九〇卷 志三〇卷 南朝宋范曄撰 唐李賢注

(志) 晋司馬彪撰 梁劉昭注 「南宋初期」 兩淮江東
軋運司刊〔南宋中期・元〕通修(卷一補写) 六六冊

後補藍色絹表紙(三一・七×二二・六センチ)、金鑲玉装(料紙
高さ二八・五センチ)。

副紙に野紙を貼り、「後漢書二百二十卷六十六冊八函」と題し、「常熟翁叔平相国蔵」(翁同龢・清咸豐六年進士)と結ぶ一文があるが後に掲げる。次でその次葉にかけて、同版本(原刻)の地理志第二二第一〇葉裏の第二行以下を貼り、さらに別紙の王国維の識語を貼る(別掲)。零葉には次掲本と同じ「烏程／蔣祖詒／蔵書」印がある。目録一冊全三四葉は補写、刻工名、字数も記す。

卷一上下六九葉も補写。したがって本文首題は「明帝紀
(^隔二格) 范曄 (^隔二格) 後漢書二／(低八格) 唐韋章懷子 賢注」。
この葉は元修。

左右双辺(二二・二×一七・四センチ)、九行、一六字・注文小

字双行。卷二は全三〇葉が元修で、その首集の版心は線黒口、双黒魚尾、上象尾右側に字数を、下象鼻に刻工名を刻する。卷三は全二九葉中に原刻が一六葉で、その首葉は白口、単黒魚尾、刻工名が周清である。この巻の第二六葉裏には「淵聖」の避諱があり、また第二二葉の表や卷四第四葉表、では「慎」字を欠画しているが、これらは原刻葉である。卷四は二九葉中の二三葉が原刻。南宋中期の修葉もある。

避諱は右のように一部は欽宗の桓を淵聖御名に、高宗の構を今上御名とし、またこれを桓、構の末画を欠く形に入木して改めるところがある。さらに慎字の欠筆もあり、容齋隨筆にあつたように、紹興中に「淵聖」「今上」と避諱したあと、次の孝宗期に一部を改刻したもののようである。卷六第二七葉表第八行には慎が二字あつて、一は末画を欠きながらその根元がわずかに残り、もう一は欠かないが、前者は後に削った証拠で、初刻では欠筆しなかつたのであろう。そのほかに、玄朗敬驚竟弘殷匡頴恒徵懲讓樹垣瑗構等の諸字に欠画がみられる。

刻工名は、原刻・南宋中期修・元修に分けて左に掲げる。
3 干洋 毛仙 毛伸 4 王中 王允成 王永 王永從 王石
王仲 王琮 王榮 王端⁵ 丘甸⁶ 朱安明 朱明⁷ 何通

余仲 吳佐 李用 李秀 李昇 李杲 李芳 李彦 李裳

10 倪顛 孫斌 孫誠 孫開 徐艾山 徐良 徐明 徐榮祖

李椿 李碩⁸ 卓受 周清 林仁 林志遠 林芳 林俊 林康

徐泳 高涼¹¹ 婁正 張三 張明 張狗 張珍 張福一 曹中

10 荆宣(刑宣)¹¹ 張宗 章旻 章英 章駒 郭惇 陳至 陳伸

曹后 曹榮 盛九 章文 章文一 章重明 章演 許成

陳彥 陳振 陳從 陳敏 陳震 陳興¹² 程用 華定¹³ 楊采

陳之 陳文玉 陳日裕 陳明二 陳邦卿 陳万二 陶中 陸永

楊垓¹⁵ 劉中 劉仲 劉清 劉寔 鄧堅 (以下原刻)

12 喚之 程月 程用 童遇 貴伯中 黃子敬 黃伯¹³ 楊榮

5 日新⁶ 朱玩⁷ 宋琚 李允 沈定⁸ 周成 金震¹⁰ 孫春 徐珙

葉禾 葛仙 葛仙一 虞良 詹德滿¹⁴ 寿之 熊道瓊 滕慶

馬松 高異¹¹ 章東 陳允升 陳仲 陳政 陳鎮¹³ 揚昌¹⁵ 蔡仁

齊明¹⁵ 德裕 潘用 蔡秀 蔣七 蔣仙老 蔣蚕 鄭埜¹⁷ 應德

鄭春¹⁹ 龐汝昇 (以上南宋中期修)

應子華 繆珍¹⁸ 魏伯夫²⁰ 鐘同寿²¹ 顧中信

3 士中 子成 子敬 千山 弓華⁴ 今許一 太亨 文一 文玉

(以上元修)

文昌 方明四 毛原敬 王元 王元亨 王付 王正 王百九

目錄および卷一全葉のほか、補写が次の各葉にある。紀八第

王全 王仏生 王明 王得 王渙 王榮 王德明 王興

一六葉、志三第三・四・八・一一・一八・二〇葉、五十九、六一

5 丘拳之 以子華 占灑 古賢 平山 石閩 石宝⁶ 仲召

八、八十七・八、一〇一、一二一、一三一、一五十七、

任子敬 任昌 任阿伴 任韋 全二 务陳秀 务景先 朱元

一八一、二、伝一一九、九一二、一三三〇、四九一一、

朱大存 朱珍 朱曾 朱曾九⁷ 伯夫 伯志 伯忠 何宋十七

五六二、六八一、七二七、八一三・八・一一、八二一

何益 何敬 何慶 君宝 吳五 吳文呂 吳仲 吳仲明

一七、八六一・二・三七、八七一・一〇・二三・二四・三一、九

吳祥 吳睡 李庚 李崑 李祥 李章 杜亮 汪惠老 沈一

〇一一。また志七第三葉、伝一第八葉が欠葉。

沈山 沈寿 谷中 辛文 阮明 阮明五⁸ 周秀 周明 周春

蔵印は「季印／振宜」「滄／葦」、「任邱王／亦進字／晋卿蔵」

周鼎 孟三 宗文 杭宗文 東辰 林茂叔 芦開三 青之

(陰)、「宝絳閣／蔵書記」、「子析」、「汪喜／孫」(陰)(後名喜荀・

9 兪榮 施沢之 洪来 胡昶 茂実 范双評 范堅 茅化竜

一七八六(一八四七)、「翁印／之熹」(陰)(翁斌孫の子)。

紙背は明洪武年間初期の公牘紙で、よくは見えないが、後掲の魏書と同類の各年里長甲首の一部などのようである。朱筆の枠内に「洪武□年」、その下方に「孫均九」以下の農民の名がある。

一九五一年に修文堂から購得したとされる。

副紙の「後漢書一百二十卷六十六冊八函」は（「六十六冊八函」は本文より後筆）の全文は左の通りである。

「宋紹興刻大字冊字紙印本季滄葦補鈔目錄三十四葉第一卷上下六十九葉／又各卷中鈔三十五葉又志七第三葉列伝一第十八葉空白二葉統計三千一百／九十九葉原裝金鏤玉六十六冊九行十

六字注雙行白口單魚尾板心下／記刊行姓名林俊陳伸陳從陳敏周清王中蔡仁林康

林仁章駒章英李昇／郭惇李芳王允成王永從王榮陳振毛仙章叟卓受全中／李椿華定林芳／朱安明楊垓陳彦李秀林志遠龐汝昇李棠

補刻線口雙魚尾板心上記字数下記刊行姓名壽之黃子敬洪來弓華／伯志士

中石閻政金王中彭未建徐陳盛／宋諱敬驚恒竟桓慎讓徵樹等欠末

筆／有季印振宜朱文印滄葦朱文印子析朱文印苾華吟舫印／常

熟翁叔平相國藏書」

次で王国維の題識がある。

「宋刊九行本三史余所見有南海潘氏烏程劉氏所藏史記每半葉九行十九字其列／伝二十七後有左迪功郎充無爲軍と学教授潘且校对右承直郎充淮南轉運司幹弁／公事石蒙正監雕二行是南

渡初淮南漕司刊本此殘葉半葉九行行十六字与史記行款略同／

攷洪氏容齋統筆云前紹興中分命兩淮江東轉運刻三史板史記刊

於淮南則此／後漢志亦當是江淮轉運所刊矣史記板至明中葉尚

存南雍志所謂大字史記是也／惟兩漢書板早亡故此本世極罕見

密韻樓藏明鈔成祖實錄以此葉作封面穀孫檢／得之余亦乞得半

葉裝爲小幅既跋余本因復爲穀孫題此壬戌四月國維「觀堂」陰」

小幅に装したものが前の文に続いてあった志卷二二第一〇葉

の裏の第二行以下で、蔣汝藻（一八七七—一九五四・伝書堂・

密韻樓）の子の蔣祖詒から、王国維が譲られたという。それが

後にこの本に貼られたものである。後漢書はこの兩淮江東轉

運司刊本が百衲本に採用されたから、対比は容易である。なお

文中の史記の潘・劉氏蔵の史記は、欠卷等を相補つて民国八年

（一九一九）年に劉氏嘉業堂によつて模刻されたが、その版本

はその蔵書樓とともに浙江圖書館に寄贈され、湖州南潯の同樓

の宋四史齋に保管されている。

さて兩淮江東轉運司刊の後漢書は、南宋中期と元の通修なが

ら、補刻のきわめて少い本が北京圖書館にあり、百衲本二十四

史に影印されているが、卷二二—一六が補写である。このうち

卷一四—一六は北京圖書館蔵の別の一本に存し、卷一四・一五

新補紫色表紙（二八・五×一六・六_チセ_ン）、金鑲玉装（料紙高さ二四_チセ_ン）。

本文首題「章帝紀第三（_{三格}）^{（隔）} 范曄（_{二格}）^{（隔）} 後漢書三」。双辺（一九・八×一二・四_チセ_ン）。版心 線黒口、双黒魚尾、題「後紀三 後漢書三卷」。耳題がある。

蔵印は徐乃昌（一八六八〜一九三六）のもので、「徐乃昌讀」「積学齋徐乃昌蔵書」「孟樸校勘／経籍印記」「積余秘笈／識者宝之」。

別紙用箋に宣統五年（民国二年・一九一三）沈曾植の識語がある。

「残宋本漢書每頁二十行行十八字楮墨精絶／世所称慶元本建安黄宗仁善夫所刻也黄氏／刻史記前後漢書其史記爲王延喆本之祖正／義最完其兩漢書爲武英殿官本之祖三劉／攷異亦最完今以殿本攷証正予樂_{三卷}朕旦權_{四卷}／兩条覈之所称宋本皆与此合知所拠即此本／矣 積余蔵所至富而珍此殘本是直所謂闕于劍而知劍者宜統五年三月嘉興沈曾植記」

同版の前掲本に巻次が続くために、同一の木箱に收められ、三一冊とされているが、登録番号がこれは七九一四一五、前掲の三〇冊が七五八四九一〜五二〇と別にされている。

同 元大徳九年（一二〇五）寧国路儒学刊〔元末明初・明〕通修

後補銀切箔散黄土色表紙（二六・九×一八・二_チセ_ン）。襖装。八十冊

宋景祐元年余靖の上言、その末に「大徳九年十一月望日寧国路儒学雲教授任内刊」の二行がある。次で後漢書目録。

本文巻首「光武帝紀第一上（_{三格}）^{（隔）} 范曄（_{二格}）^{（隔）} 後漢書一上／（低九格）唐章懷太子 賢 註」。

双辺（二一・六×一五・二_チセ_ン）、一〇行、二二字・注文小字双行。版心 白口、双黒魚尾、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻し、中縫に「後漢一上」のように題する。

線黒口と粗黒口の修葉があり、線黒口の方の多くは、上象鼻か下象鼻の右半が剝去されている。補刻については刻工名を按じて述べるが、元末明初、明成化一八年、弘治、嘉靖以前と四回は行われていると思われる。

各巻の末に次のような校正の各一行がある。
張輿王鰲校正

紀4下〜10下 志23724 伝15691228607677

張桌同許応斗李荆安校正 志9 10

張桌胡大用許応斗校正 志11

張桌胡大用李荆安校正 志13 伝15

張桌胡大用程紹慶校正 志16 17 19 伝3 16

張桌同李荆安校正 志29

張桌校正孫張能官 伝25

張桌校正 伝39 41 64 下 73 74

寧国路学生王師道校正 志30 伝30 下 49 50 上

王師道校正 伝11 17 31 36 44 47 48 56 58

王鰲叟校正 伝40

張桌同李繼善校正 伝42

原刻刻工

4 公林 尤子明 尤林 王泉 7 古杭何通 何瑞 秀岩 9 茂卿

10 益之 11 陳明 12 雲卿 13 楊秀岩

粗黒口の補刻葉は元末明初ころのもので、左の名前がある。

白口の二名も元末か。

7 呉邵 8 周春 10 高山 高泰 11 張伯 張伯濃 許宗 陳添 12 葉就

傅繼之 13 楊祖 (白口) 王林 黄右

線黒口で、上象鼻の右側を切取って別の小紙片を補った葉が

かなりあり、また下象鼻の左右もときに剝去されている。下象鼻の残されたものには、「監生謝遂写／監生黄慶対」のように国子監で版下を書き、これを校対した監生の名が彫られ、抄手には他に何清、李弼、汪鑑、曹広、董辛、廖縉らがいる。また、肖、玉、許、其、名などの刻工名らしい単字も見える。これらの各々の名のほとんどは、叢刻の大徳一一年建康路儒学刊の唐書にもあり、その上象鼻にはいずれも「成化十八年」と刻されている。すなわち明成化一八年の修業で、これを隠すために剝去したものである。なお、後掲の本館蔵の唐書にもやはりこれが行われている。

なお、字様に明朝体の色を強く帯びた葉があり、明の嘉靖年間かそれに近いころの修刻と思われる。標記にはこれらを含めて、「元末明初・明通修」とした。

蔵印は「恩福堂／蔵書印」、「啓淑／信印」、「晋陵唐氏珍／蔵経史図書」、「董身／殿大／学士」と印文不明(二字)印、「両耳不聞／窓外事 / 式心唯読／聖人書」で、前掲の太平路儒学漢書にも捺されている。

又 零本(存卷一八―二二) 至〔明成化一八年〕通修

後補濃焦茶色表紙（二六×一七・八センチ）、襖装。

一冊

本文巻首「後漢書志第十八（隔六格）劉 昭 注補」。首葉の版心は線黒口で右半を剝去し、双黒魚尾、題は「後漢志十八」、下象鼻に「監生何清」とあり、明成化一八年に至る通修本である。

上海図書館の蔵印だけを捺す。

三国志零卷（存卷二八第一四・一八〜二九葉） 晋陳寿

撰 南朝宋裴駟集解 「南宋初期」刊〔同前期〕修

（紹興本）

一帖

木製表紙（二〇・八×一八センチ）、絹地題簽「宋刻魏志殘本張元濟題」。同じ大きさの厚手の紙を折帖にし、見開きに一葉ずつを貼る。存計一二葉。

魏志卷二八王丘諸葛鄧鍾伝の一部。最末の葉は版心の丁付のところ傷んでみえず、ここに「末葉 諸葛誕伝応移装首装」と記した挿紙がある。この本文を行格が同じ衢州本に照せば、順序が逆で、第一八葉以下の鄧艾・鍾会伝に先んじる諸葛誕伝のなかほどの第一四葉であることがわかる。

首尾題は欠。左右双辺（二〇・九×一四・七センチ）、一〇行、

一九字・注文小字双行二一字。版心 白口、単黒魚尾、補刻らしい葉の一部に字数を刻し、「魏志二十八」の題の下に丁付と刻工名がある。欠画は、玄朗驚弘竟徹完構の各字に行われていて、慎字は現れない。避諱字の右下に朱圈点が付打れている。版心の下半は痛んでいて、刻工名の読めるものは王彦だけで、他に単字の智、三字の末の榮が見える。

字様は整って美しいがやや筆勢に乏しく、唯一の完全な刻工名の王彦が北京図書館本にもあり、加えて構字までを欠筆するところから、いわゆる紹興本とみてよからう。とすると、刻工の□□榮は詹世榮、智は牛智か。紹興本はおそらく衢州本にとって代られたものと思われ、現存本はこれら二部のほかにはない。ただし、中国古籍本書目はこの上海図書館の存一卷を「宋衢州州学刻元明通修本」と著録する。

蔵印は、「景葵所／得善本」（葉景葵・一八七四〜一九四九）、「合衆図書／館蔵書印」。合衆図書館創設（一九三九年）の主唱者の葉景葵から、同館に供されたものである。同館については、次に識語を寄せる曹元忠が直接に所持していたことなどもあって、後掲の宋書のところで触れることにする。

王国維、曹元忠、蔣汝藻の識語が次のようにある。

「残本魏志卷二十八存十三葉每半葉十行と大十九字小廿二行避諱至完構二字止而孝／宗諱慎字不避此宋南渡初衢州刊本也明南雍旧板有宋衢州刊三国志卷末有修職／郎衢州録事參軍蔡宙校兼監鏤板右迪功郎衢州之學教授陸俊民校正二行其板式／行款全与此本同則是即衢州本也衢州本在南宋時時其板已入甯監南宋監本諸史記兩／漢書用兩淮江東漕司刊本唐書五代史用湖州刊本則三国志即用衢州本可知自是而入／元西湖書院而入明南雍今南雍印本雖不見之刊有宋刊一葉當由明代修補易尽旧／板所致則此又即南宋監本也然求其根源實出北宋監本攷宋初監本諸史惟有十行／十九字一種余所見江陽傅氏所藏北宋刊史記常熟瞿氏所藏景祐本漢書嘉祐本唐／書與諸家所藏福唐重刊淳化本兩漢書皆十行十九字也國志初刊於咸平其行款自／當與淳化刊三史同然世訖未見有北宋刊本惟黃復翁所藏單行吳志後歸之安陸氏者／前有咸平六年中書門下省牒及咸平三年校勘經進諸臣銜名每半葉十四行と廿三字／昔人多以此爲咸平祖刻實則書中避欽宗諱桓字又銜名中句當字此改作幹當亦避／高宗嫌名爲南宋重刊無疑又槐竹汀日記謂黃藏吳志卷首銜名外卷末別有校正人名／其署銜云辟雍正陸氏藏書志失載攷宋史選舉志徽宗崇寧元年始

立辟雍署博士正録／官与太学同宣和三年罷則辟雍正一官惟徽宗朝有之然則黃藏吳志乃南渡後／重刊徽宗朝本謂爲咸平祖刻鶴突殊甚此本行款独与宋初所刊諸史同則咸平／本面目自當於此本求之矣又紹興中兩淮江東漕司分刊前三史今傳世者尚有淮南漕／司所刊史記及殘本兩漢書皆半葉九行と十六字此本亦刊於紹興中乃用旧監本行款／蓋南渡後諸史於各州郡分刊板式自不能画一也至半葉十四行之本諸史多有之証以／單行吳志則當出於北宋末監本然尚未能証實惟咸平祖本面目不存於單行吳志而／存於此本則固目錄家所當首肯也 庚申季秋海寧王国維於滬上寓居之永／觀堂 「靜」(陰)「王」(陽)「國維」(陰)「陰」

「陳君未通以國志殘卷十二葉見示余以其每半葉十行と十九字与北宋監／本史記兩漢書同又避諱之字至於完構此欠筆也定爲紹興間覆北宋本／所存魏志鄧艾鐘会二伝首尾尚不完備而会伝注引会爲其母伝著范／氏少子爲趙簡子設伐邾之計事見列女伝仁智篇當作株顧平生所見／各宋本無不作伐邾者頗疑邾爲會鞏等未及校正之字故雖旧鈔景宋／單注本尚然則宋以後本無能作伐株者矣然列女伝亦鞏等所校其仁智／篇自作株字觀說文繫伝引列女伝云智伯之園多株不便於鳥范氏之子謂／代之也雖以趙簡子爲智伯而於伐株不誤可見唐宋写本列女伝作株而會鞏等／仍

之故今世流传宋巾箱本列女伝亦作株可証書以未通当亦晤余張日也時／太歳庚申七夕前四日吳曹元忠客南林蔣氏橋滬之密韵

樓「曹注」

「右宋槧殘本魏志諸葛誕伝一葉鄧艾鐘会伝十二葉南渡後覆刊北宋刊本頗多蹣跚除／君直所举伐株作伐邾外知諸葛誕伝漚墨甚峻、誤作峻注蔣班彝言于諸葛誕曰葛誤作／萬鄧艾伝彼南安隴西因食羌穀彼誤作從徑漢德陽亭趣涪、誤作倍頻于危殆危誤作造涉前人造字而誤／又曰姜維自是一時雄兒也又誤作夫若便送禪于京都京誤作涼珍虞護軍緩邵珍誤作珍叉手／屈膝又誤作又而王竟不足以守位、誤作任注纂性急少恩少誤作公中于敝大司農敝誤作畝至待／中中書令、誤作今往得中也、誤作光帝遂尋問艾問誤作同一何駛乎駛誤作駛鐘会伝繇遣見濟／見誤作見由是獲聲譽由誤作田注臣松之臣誤作曰枢機之發枢誤作馭丙容貌如生貌誤作伯勤見／守辺讓奪一九字凡十三葉中譌二十四字衍三字奪一字攷北宋監本經黃夷簡錢惟演等六人／校勘杜鎬等四人詳校当不至如此舛誤必覆刊致誤無疑又書中徵字皆欠筆独鄧艾伝徵拜／長水校尉之徵不欠筆細審此葉係宋季補刊故避諱有寬嚴之別又此十三葉中如諸葛誕伝一葉／及第十八第二十第二十一諸葉皆宋時補刊也又如第二十八葉前八行二十九葉後五行上下皆

有剗補／之字紹興原刻尚有北宋刻遺至剗補之字当在南渡中葉後矣質諸叔通以爲何如庚申七月／將赴京師倚裝漫題烏程蔣汝

藻「案」

三者ともこれを南宋初（紹興中）刊本とし、ほぼ北宋監本の覆刻とみている。一〇行一九字の行格はいわゆる景祐刊の三史と同じであるから、その可能性はあるが、北宋末南宋初に三史が覆刻された際には、三国志は、少くとも呉志は、靜嘉堂藏本と同じ一四行二五字本が刊刻されたことを、その呉志のところ述べた通りである。そして王氏は衢州本であるというが、私これが紹興本で、次掲のやはり零巻の方が衢州本であるとみる。行格は同じながら、両本は別版である。

曹、蔣氏が校合してこの本が誤りとした約二〇箇所は、南宋中期建刊本（いわゆる紹熙本、宮内庁書陵部蔵）、南京・北京の両国子監本の方はすべて正しい。衢州本も、現存本はこれと同じ葉はみな明修であるが、三箇所だけがこの本と同様に誤り、他は蔣氏が是とする字に同じである。この点でもこれは衢州本ではないことになるが、紹興本が「凡十三葉中、譌二十四字、衍三字、奪一字」とされるのはまことに意外な結果である。

蔣氏の校勘記の次に、顧廷龍氏の左の二行がある。

「陳叔通先生將移家入都檢篋得此見贈閱之蓋題葉揆初先生所藏魏志殘本／者皆有裨於校勘爲特黏廁冊中以示讀者顧廷龍記一九四九年十二月」。

同 零卷（存卷二二第二葉裏一〇・二一―二四葉）

〔南宋前期〕刊〔宋末元初〕修（衢州本） 一冊

目錄に「在卷一至十六卷二十二各卷殘葉」とあるうちの卷二二殘全二三葉である。卷一―一六というのは後印の別本で、次に掲出するが、それも一六卷はなくて存五卷のようである。

白紙を二重にした仮表紙（三一・一×二〇・二センチ）、包背装。

首葉を欠いて本文の首題も欠。左右双辺（二一・二×一四・六センチ）、一〇行、一九字・注文小字双行二一字。版心 白口、

単黒魚尾、題「魏志二十二（丁付）（刻工名）」。刻工は順

に、宗 鄭意（邵貴か） 鄭彦 祝文 陳圭 同 徐辛 同 張生 江太 同 葉口 なし。これらの名は北京図書館蔵の紹興

本首三〇卷のなかにみえず、次に他の書の刻工と較べるが、衢州本の原刻ではなからうか。末の第二四葉だけは線黒口で匡郭も一廻り小さく（二〇・五×一四・八センチ）、版面中央に左右に小さな亀裂があるものの、前の一二葉の文字が漫漶のためやや

瘦せているようなことがなく、宋末か元初ころの補刻とみられる。

刻工は阿部隆一氏の宋元版刻工名表によれば、鄭彦が北宋末南宋初刊のいわゆる景祐刊の史記（中央研究院歴史語言研究所蔵）と台北の故宮博物院蔵の清影鈔宋刊の類編に、張圭が南宋初期阿淮江東転運司刊の漢書に、祝文が南宋中期の慶元刊の樂書（中央図書館北平蔵）に、陳圭が中期も終りの嘉定刊の孫氏算經（靜嘉堂文庫蔵）に同じ名がみえる。符号する数が少いから断定しにくいだが、この行格の三国志の現存本から推せば南宋前期刊としか考えられず、百衲本に影印の紹興本のこの巻は刻工名が異なるから、これらが衢州本であることの可能性が高い。

欠画はこの二三葉ではかなり厳格に行われ、玄朗 敬 貞徽 徽 署樹 讓の字にある。補刻の末葉の尾題は「桓二陳徐衛廬伝第二十二（低一〇格）魏書 国志二十二」。第二二葉表第一三行注左の慎字の末二格が欠けているが、その形から欠画とは思えない。

又 零本（存卷一・二・六―八）（南宋前期）衢州

刊（元―明）嘉靖一〇年通修（明馮夢禎校本）二冊

香色覆表紙(三二・一×一三・三_チセ_ン)、やはり香色の元表紙は、第一冊は破片状になったものを修復して、「□書卷一之二」の墨筆外題が辛うじて見え、第二冊は完全で「魏書卷六之八」と、そして別筆でいっばいに小題(伝名)の目録を墨書してある。

明嘉靖南監印本には首に大徳丙午(九年)池州路儒学刊本の朱天錫跋が誤綴されているが、その尾一葉が存する。続いて上三国志注表と三国志目録上、注表の末半葉に呉省蘭の手跋があるが、後に掲げる。

本文卷首「武帝紀第一(三_隔格)魏書(三_隔格)国志一」。左右双辺(二〇・七×一四・五_チセ_ン)、一〇行、一九字・注文小字双行。この首葉は元修で、他にも原刻らしい葉は見当らない。

各卷末に次のように南京国子監祭酒馮夢禎の校記がある。

卷一末 丙申正月十四日清晨校終魏志／本紀 夢禎 (朱筆)

卷二末 万曆丙申正月十九日校完文帝紀／ 夢禎 (藍筆)

卷六末 乙未十二月廿日校完此卷／□禎 (朱筆)

卷七末 万曆廿三年十二月廿一日校完此／卷 夢禎 (朱筆)

卷八末 万曆乙未十二月廿六日校完／祭酒馮夢禎 (藍筆)

補写の卷七第一七葉の眉上にも、「乙未十二月／廿一日夢禎／手写補十／七号」と朱書されている。

本文の眉上に朱筆二手と藍筆の校語があり、朱の薄手と藍は馮夢禎により、朱の濃い方は墨色からみて左の清谿のものである。清谿については後に呉省蘭らもいうようにわからない。

卷二末 乾隆癸巳十一月初三至四日校完／清谿

卷八末 十一月十五日校勘 清谿

なお、略字や異体字を訂すだけであるが、墨筆の校字もある。

両冊首に明の「南京国子／監官書記」と、それを覆うように「典籍／序記」の大型二印が捺されている。さらに「呉印／省蘭」(陰)「稷／堂」(文淵閣校／理翰株／院編修呉／省蘭印)、「韓繩大」／名熙字侃／藩読書印」(陰)。

上三国志注表末の呉省蘭の手跋は、以上のことどもに触れて次のようにいう。

「明南監版三国志三十卷馮夢禎校用墨筆每卷末署／万曆丙申某月某日校完間有署監生劉世教校者／每冊前印隸書南京国子監官書記長記一楷書典籍序記方記／一皆以硃浙江通志文苑伝馮夢禎繡水人字開之万曆丁丑会／元官編修時阻奪情忤張居正引病免後復官遷南司業／歴祭酒与諸生砥名節正文体尋中蜚語歸考史居正

以／万曆五年奪情十年卒此署丙申爲万曆十四年正夢／禎爲祭酒時也板多泐字又有硃字以宋元本校正並參用／他書訂証頗爲用心卷末署乾隆癸巳某月某日校而自称清／谿与劉世教俱不知爲何人蓋古今之不求名而名不彰者多矣識／之以俟考乾隆丙午六月十四日南雍吳省蘭跋」

さらに「明修宋衢州本三国志 十六本」と題する筆者不明の挿紙があり、

「馮夢禎通部手校每卷俱有校完年月可考書中欠頁手鈔／補入／吳稷堂先生跋称劉世教不知何人今檢得明詩綜第五十八卷／所載劉世教字少彝海塩人万曆庚子舉人官廉乘知県／有研宝齋稟又著有合刻李杜分体全集其序又見王琦／注李太白集卷三十三清谿所校者乃臨何義明宋校本也」

という。

明南京国子監二十一史は、まず嘉靖七〇一〇年ごろに編成され、三国志は宋衢州刊本が補修を重ねて用いられたが、これはその本に万曆二三・二四年、祭酒馮夢禎がみずから校訂を施したものである。この結果、同二四年に万曆版の三国志が新彫され、首に馮夢禎の叙重刻三国志が掲げられ、各巻末に「丙申正月十四日清晨校終魏志武帝紀／夢禎」(巻一)のように、この

本とほぼ同じ校記が刻されることになる。

馮夢禎の重刻序には、「有宋本魏志、原欠吳蜀、乃參監本」とあり、乾隆五年(一七八六)の吳省蘭やそれ以後の挿紙がいうのと同じく万曆二四年(一五九六)当時の南京国子監には、この本は魏書三〇巻一六冊が存していたにすぎず、かつ利用できなかつたようである。至明嘉靖一〇年修の衢州本は現在も一〇本ほども残るだけに、このことはいささか理解に苦しむ。

校合の順序は必ずしも巻次によらず、魏書では巻三の「乙未十二月十五日」がもっとも早く、巻三〇の「万曆丙申四月(劉生劉世教校)」に至る。蜀書、吳書は、このあと四月一八日(巻三三)ごろから同二〇日(巻六五)までに行われた。

次に監生劉世教の履歴についての指摘があつたが、この残本にはないものの、万曆南監本にはしばしばその名が見られる。まず馮夢禎の重刻叙に「佐校者監生劉世教」といい、巻二四末に「丙申三月監生劉世教」とあり、これがほぼ前掲の巻三〇まで続く。馮夢禎は巻二一までは自身で校正したが、そのあとを劉世教に委ね、蜀吳志に移つたらしい。

清谿については、これを字や号とした清人は少くないが、呉清蘭がわずか一三年前の人を「不知爲何人」としたまま、いま

も特定できない。

なお、南監万曆二十一年史は万曆二年に史記から刊刻が始ったが、馮夢禎はその作業の最後の祭酒であつて、再度の史記（同二四年）から三国志、宋書、魏書を手がけた。右に見られるような校記は、魏書卷八三下の丙申（二四年）九月二十六日付のものまでである。

同 零本（存卷四二後半・四三前半）元大徳一〇年

（一二三〇六）池州路儒学刊

二冊

後補紺色表紙（三一・四×二一・三_チ）、粘葉装、一紙ごと
に白紙一枚を挿む。

第一冊の卷四二は首一二葉欠で、存第一三一二葉、尾題が「杜周杜許孟来尹李譙郤伝第十二」。第二冊は首題「黄李呂馬王張伝第十三 蜀書 国志四十三」に始つて、存第一一二葉、ただ第五葉を欠き、卷四二の第一二葉が末尾にある。

目録稿には卷四三とだけあり（中国古籍善本書目も同じ）、第二冊、第一冊の順に重ねて出されたところをみると、これはどうも卷四三の二分冊と誤解して挿架されているらしい。首題に卷四三とあるうえに、丁付の数字をみれば、欠けた第五葉を

除いて、一一二と続くからである。

双辺（二一・四×一五・五_チ）、一〇行、二二字・注文小字
双行。版心 線黒口、三黒魚尾。上象鼻の右半に字数を刻し、
左半は路儒学名を消したのか、墨釘の葉もある。題は「蜀志十
二（十三）」、下象鼻に単字の刻工名が、王文正可甫等。

藏印は「金菊子」「張□之印」「仲／或」「子々孫々／永保」
（円）。いずれもその主はわからない。

大徳一〇年池州路儒学刊とは、衢州本の首に明南監修のこの本の序が誤綴されていることから判明する。九路儒学刊十史のなかで三国志の残存は比較的少く、台北の中央図書館に完本であるが明修本が二部あるほか、中国古籍善本書目には北京図書館の存五卷（卷一五一一九）（二冊）とこの本が併せて著録されるにすぎない。

晋書一三〇卷附音義三卷 唐房玄齡等奉勅撰 何超音義

〔元覆南宋中期建刊本〕〔明〕通修 二八冊

新補香色覆表紙（二七・四×一六・一_チ）、元表紙は薄茶で、
「晋書」の単郭題簽を貼る。

晋書目録三二葉。本文卷首「帝紀第一（隔四格）晋書一／（低五

格)唐太宗皇帝(隔三格)御撰」。

左右双辺(一八・五×一二・七センチ)、一〇行、一九字。版心
小黒口、単黒魚尾、題「晋帝紀一」。帝紀、晋書帝紀等とも
刻する。

宋諱欠画がわずかながら残り、敦敏廓字までに行われていて、
元代に南宋中期建刊本を覆刻したものであるが、原刊本はまっ
たく現存しない。これと同じ覆刻本は唐書と五代史記にもある
が、刊刻の時期は唐書(天曆二年(一三二八))の前後となろう。
原刻と思われる葉は少く、明初ころの粗黒口の修葉がかなり
ある。字葉は粗く、拙い。員三刊の刻工名がある。

次で線黒口で上象鼻に「正徳六年刊(一五一二)」と刻し、
下象鼻に写・抄・謄として、朱進 吳朱 吳得用 吳寿 余元
善 李紅 景文右 陳景淵 黄仲逢 葉延芳 葉来四 葉保
葉象 詹陽 詹積英 羅棟、刊として王景英 江取之 黄記良
と、版下抄手と刻工の名が刻される葉がある。この形式は九路
儒学刊本等の成化中の南京国子監修の場合と似るが、年代と監
生としないところが異り、もともと坊刻本であつて、墨釘の
箇所もあり、南監系の修補本とは別のように思われる。

さらに上象鼻に「府劉校」とし、下象鼻に次のような刻工名

を刻する葉がある。六四 巴八 王二 王良 朱一 江二 江
三 江四 江八 江達 余一 余二 余進 吳五 吳朱 吳珠
周進 范八 陸四 葉馬。明中期の修か。以上三期の補刻が
みられるが、標記には〔明〕通修とした。

尾題「晋載記三十(隔五格)晋書一十」。その次に唐何超の
晋書音義三卷が附刻される。首に楊正衡の晋書音義序がある。
補写が卷二第一〇葉、卷四第五一―一八葉。欠葉が卷三五第二
〇葉、四七一―一三、八〇―二六、八四―一六、八八―一七、九
一―九、九九―三〇。その箇所には九行の罫紙が挿まれている、
ほとんどの版心上方に「一峯文集序」と刻されている。この紙
は卷二六の第一七・一八葉の間にもある。

「塩官蔣/氏衍芬/草堂三世/藏書印」「臣光/煇印」(陰)
「寅/昉」(清蔣光煇)の藏書印を捺す。

又 (欠卷二三上) 至〔明嘉靖〕通修 九六冊
後補金切箔散黄色表紙(二七・五×一七・五センチ)、金鑲玉装
(料紙高さ二五×三センチ)。

晋書目録(首八葉補写)。

本文首題、匡郭の寸法など同版の前掲本と同じいが、第二葉

が前掲本は原刻、この本は明初と思われる粗黒口の葉である。両本とも補刻はさらに二度は重ねているのに、このような相違はいささか不可解であるが、やはり同修であろう。

上下象鼻を墨で塗りつぶした葉が非常に多い。そのため正徳六年の補刊年記はまったくなく、わずかに下象鼻の「葉延芳贈朱祐一」一例を残すだけである。次の補修の「府劉校」もただ一葉にみえるにすぎない（下象鼻は「謝太」）。そしてさらに字様が明朝体を濃くした嘉靖ごろの修葉があり、この上象鼻も塗沫されている。何超の音義三巻がある。

目録首八葉のほかに、次のように補写葉がある。巻三一―四葉、一七一三〇、二三一一七・一八、二九一三〇、五九一一六・一七、六二一二五、七四一三〇、七八一一一、八二一二六、一一三一一四、一一六一一六、一二二一五、一二五一一三。蔵印は「恩福堂／蔵書印」(陰)等。

同 (元 浙) 刊 明正徳一〇・嘉靖二・九・一〇年
通修 三〇冊

香色表紙(二七×一八・九_チセ_ン)。晋書目録は首七葉欠。
本文巻首「帝紀第一」(低六格)唐太宗文皇帝(四_隔格)御撰。

左右双辺(二二・三×一六・七_チセ_ン)。一〇行、二〇字。版心線黒口、双黒魚尾、題「晋帝紀(列伝)幾」。上下象鼻に字数や刻工名を彫るが、刻工名は首葉の李友文のほかにはほとんどなく、その李字もかすれて王のようにみえる。修葉は上象鼻にしばしば「正徳十年／司礼監谷刊」「嘉靖二年／国子監刊」「嘉靖九年(補)刊」「嘉靖十年補刊」などと刻し、正徳一〇年葉に王舜元の名がある。

この本にも何超の晋書音義三巻を附す。楊正衡序。
巻一〇・一二六・一二七末は一ないし数葉を欠く。

「許印／喬林」「石華蔵書／子孫永宝／鬻及借人／是皆不考」印。許喬林は清海州の人。

宋書零本(存巻七三・七四)(有欠) 梁沈約撰 (南
宋前期 浙) 刊 (南宋中期・元) 通修 一冊

後補濃紫色絹表紙(三六・六×二四_チセ_ン)粘葉装。

巻七三の首葉を欠き、第二葉は元修であるが、左右双辺(二二・五×一二・六_チセ_ン)、九行、一八字。版心線黒口、単黒魚尾、題「宋書伝三十三」、下に徐良の刻工名。南宋中期刻工が龐汝升 曹鼎 孫琦 沈定 何建 沈昇 賈祚 王端、元修刻

工が徐良のほか翁子和と単字の刘魏泰。なお卷七四の首題は「列伝第三十四（四格）宋書七十四（七格）臣沈 約 新撰」。

避諱欠筆が玄恒桓構等の字にみられるが、すべて補刻葉でもあり、あまり厳格でない。

欠葉は卷七三が第一葉、卷七四が第三・七・九・一六葉と第二二葉以下の二六葉。

匡郭の周囲がたつぷりある大型本で、みごとに蝶装であるが、南宋中期修八割、元修が二割ほどで、原刻葉は残っていない。

百衲本のこの両卷には、呉興劉氏嘉業堂旧蔵、台北の中央図書館現蔵の明の「札部官書」や清の徐乾学の印のある本が用いら

れているが、これと同印とみえ、端本ながら現存本としては最古の印本となる。

「上海図／書館蔵」印が捺されるだけである。

又 一〇〇卷 「南宋中期・元・明」至嘉靖一〇年通

修 四二冊

後補紺色絹表紙（三〇・九×二一・八チセン）、金鑲玉装（料紙高さ二六・二チセン）。

宋書目録、全一七葉が各葉残欠。第一巻もほぼ破損している。

本文首葉は元修であるが、「本紀第一（隔六格）宋書一（低一格）臣沈（二格）約 新撰」。左右双辺（二一・四×一七・七チセン）、九行、一八字。版心は多く線黒口、「宋書紀幾」のように題する。

南宋前期の原刻葉はもちろんなく、同中期修葉も刻工の陸春、楊春、章東の名はあるがごく稀で、版面の一部が修補されている。元修葉にもかなり漫漶が進み、卷七四第三三葉の版心下象鼻の「至元十八年杭州錢昭」の一行も、昭字がわからなくなっている。明代の補刊年記は弘治四年、嘉靖八・九・一〇年のものがある。刻工名（版下抄手を含む）を列挙しておく。

三六 友山 壬韋 王六 王全 王昌 王榮 王興 古賢

可川 立之 任亮 朱六 朱長二 朱曾九 何通 孝文

呉文 呉文昌 呉玉 呉昌 季崙 李祥 李宝 阮明五

林茂 林茂叔 芦開三 俞榮 洪福 胡昶 胡慶十四 范泰

范華 茅化竜 孫斌 徐义山 徐文 徐良 原山 高顯

婁正 張中 張明 張慶三 曹榮 曹興 盛九 章文 章演

章文一 許成 許茂 陳万二 陳国才 陳寿 楊十三 葉末

熊道瓊 蔡秀 応華 龐万三 （以上元修）

監生王太 王相 王泰 肖漢 李秘 姚岳 姜滄 陳沢

黄微 劉子瓊 蕭漢

(以上明弘治四年修)

黄珣 黄瑑 黄碧 黄瑾 黄琥 黄瓏

(以上嘉靖八年修)

卷二四第二三・二四葉、卷八八第七・九葉が欠。嘉靖修葉と

同質の野紙が挿入されているから、版木は印行時にすでに失われていたか。

本紀に朱句点と朱引。

蔵印は「晋陽／家蔵」「大雲／山房」(陰)、「□吳瞿／氏收蔵

／金石書／画之印」(陰)「与南周／翁同宗／与元漫／交同字」、

「潘景鄭／收蔵印」、「合衆図書／館蔵書印」。

卷末の副紙に、潘承弼(景鄭)の左の手跋がある。

「眉山七史初板入南雍通經修補印本／流传文字模糊俗称九行

邁過本又称三／朝本伝至今日蔵家著録者皆是求一／宋刻宋印

稀如吳鳳涵芬楼影印百衲本／二十四史七集畷成裘終処猶潤之

先／此宋書為嘉靖十年修版後印本宋槧／面目望氣可弁十余年

前得諸吾郷／曹氏牋經室當時有志搜羅諸史旧／本以壯蔵送人

事滄桑形神橋木／丹鉛之葉過眼雲烟而已頃於的茲／帙即捐諸

合衆図書館一鱗一片／亦足為他日之印証本 寄進「景鄭」

(陰)／ 尚有洪武本元史亦牋經室故物已先／此損贈館中」

この本は民国初に曹元忠の箋經室から潘氏宝山楼に入り、潘

承弼が上海の合衆図書館に提供し、大戦後に上海歴史文献図書

館を経て、上海図書館に收められたものようである。合衆図

書館は一九三九年、葉景葵(元浙江興業銀行董事長)が張元濟、

陳陶遺らと動乱に図書文献が散逸するのを防ぐために創設した

もので、潘氏、顧廷龍氏らもこれに出資して参加した。

南齊書五九卷 梁蕭子顯撰 「南宋前期 浙」刊「南宋

中期・元・明」至嘉靖一〇年通修 一二冊

後補標色表紙(二九・五×一九・七センチ)。

首に叙録が欠。南齊書目録も首六葉欠、残存の第七―一一葉も大きく破損している。

卷一首葉は南宋中期修葉にさらに修を加えたもので、首題は

「太祖第一(隔七格)南齊書一／(低一〇格)臣蕭子顯(隔二格)撰」。

左右双辺(二二・一×一二・三センチ)、九行、一八字。この葉は

版心 白口、魚尾がなく、「南齊紀一」と題するが、南宋中期

修葉は白口、単黒魚尾、上下象鼻に字数と刻工名と刻し、元修

葉は線黒口で双黒魚尾のものが多い。嘉靖修葉は線黒口で、上

象鼻の右半に補刊年記がある。

原刻葉はもはやなく、南宋中期刻工には、方至 王升 王渙

何沢 宋瑠 李仲 曹鼎 顧達らの名があるが、平均して一巻に一葉も残っていない。元明の修工は宋書に準じる。

卷一第二四葉、一五―三・四、三五―一〇葉を欠き、「原本欠」とだけ刻した野紙が補入されているが、前後の二葉の版心には「嘉靖九年刊」の補刊記が入っている。

卷末に崇文院の牒がない。

又 至明嘉靖一〇年通修

一〇冊

後補縹色表紙(三一・五×二二・七_チセン)。襖装。

首に叙録、末に「崇文院／嘉祐六年八月十一日／勅節文宋書齊書梁書陳書後魏書北齊書後／周書見今國子監竝未有印本宜令三館秘閣／見編校書節官員精加校勘同与管勾使臣選／摺楷書如法書写板様依唐書例逐旋封送杭／州開板／(三_低格) 治平二年六月 日」の牒が附刻される。

嘉靖の補刊年記はすべて削除されているが、前掲の一二冊本と同版同修である。ただしやや漫漶が進んでおり、わずかに後印本である。

蔵印は「何焯／之印」「岐／贍」(何焯・一六六一―一七三二)、「泰／峰」(郁松年)。

又 至明嘉靖一〇年通修

一〇冊

後補縹色表紙(三一・三×二二・一_チセン)。

首に叙録、末に崇文院牒がある。

前二本と同版同修。

蔵印「海虞朝棟／莊仲宝記」「李莊仲／圖書記」「雲山一帶／閣李氏／蔵書」(二七八〇―一八五七)、「余姚謝／氏永耀／樓蔵書」(「狎鷗／書屋」(陰)(清沈欽裴か)、「姚／三」)、「金林／珍藏」。後掲の北齊書六冊とはほ同じ。

梁書五六卷 唐姚思廉撰 (南宋前期 浙)刊(南宋中

期・元・明) 至嘉靖一〇年通修

一〇冊

後補縹色表紙(二九・四×一九・八_チセン)。

梁書目録の首半葉欠。

本文首題「紀第一(隔七格)梁書一／(低七格)散騎常侍姚(隔二格)思廉撰」。左右双辺(二一・八×二二・六_チセン)。九行、一八字。版心 白口、この葉は南宋中期修にさらに修を重ねているが、魚尾がなく、題は「梁書紀一」。

原刻葉はまったく残存せず、南宋中期・元・明嘉靖八・九・

一〇年の補刻が行われていて、その刻工名は宋書に準じる。
前掲の南齊書一二冊本、次掲の陳書八冊本と同版同修で、装訂を同じくする。

陳書三十六卷 唐姚思廉撰 〔南宋前期 浙〕刊〔南宋中期・元・明〕至嘉靖九年通修 八冊

後補縹色表紙（二九・六×一九・七センチ）。

陳書目録、そして叙録。

本文首葉は嘉靖九年修葉で、「紀第一（八隔）陳書一／（低七）

散騎常侍姚思廉撰」。左右双辺（二三・七×二二・七センチ）、九行、一八字。版心は線黒口で、上象鼻に「嘉靖九年補刊」とあり、題は「陳紀一」。

刻工名はほとんどなく、補刊年記は嘉靖八・九年。

魏書殘本（存卷四五・四六（首七葉）・六一―六五・八二・

八三（有欠））北齊魏收撰 〔南宋前期 浙〕刊〔南

宋中期・元〕通修 明洪武公牘紙印本 四冊

後補白色表紙（二七・一×一九・九センチ）。

卷首「列伝第三十三（四隔）魏書四十五」。この首葉は原刻

で、左右双辺（二三・四×一八センチ）、九行、一八字。版心線黒口、魚尾がなく横線五本で六画に区切り、第二格に題「魏伝三十三」、四格に丁付、六格に刻工名を刻する。

南宋中期修葉は白口で単黒魚尾、元修葉は概ね線黒口で双黒魚尾、いずれも上象鼻に字数、下象鼻に刻工名がある。

欠画は、敬竟匡恒貞徵讓桓構慎の各字に行われている。

明洪武年間の公牘紙の紙背を用いて刷られているから、明の初期ないしは前期の印行にかかるが、原刻葉の残存が多く、全二一八葉のうち八九葉を数える。

刻工名は前著等にすでに揚げたが、そこに洩れた名もあるから、この九巻にみえる者を更めて列挙する。文字の漫滅で原刻には読誤りがあるかも知れないが、三志、千正、余全、全彦、朱立は初めて出た名であり、南宋中期修工で方信、方能、可昇、吳忠、崔茂、元修刻工で王遇、以子華、任昌、李昌、陳允昇、章亞、許茂、董大用、徳祐、龐汝升も前著までに採録できなかった名である。これらも含めて、左に表示する。

三志 千正 元正 王才 王亢 王信 王能 王欽 王堪
王吳 史忠 任己 任亮 任欽 朱立 余全 余恭 余彦
宋全 宋彦 張萬 張善 陳立 黄又 潘忠 （以上原刻）

「戸梅林十係本都民戸洪武十二年甲首

余丁陸口

男子□□

成丁壹口

不成丁式口

婦人參口

田産官民田壹畝柒分玖厘壹毫陸絲柒忽

夏税

官

正麥參合捌勺捌抄捌粒

耗麥式勺柒抄壹椀陸圭伍微陸塵

民

正麥肆勺式抄

耗麥式抄玖椀肆圭

このほかに「御史台為湖広按察司□分司／杭州衛都指揮使牒

文誤」(兩行とも下方は切断)の文字もみえるから、明の洪武

年間前半の江南と戸籍・糧米に関する文書と思われる、精査すれ

ば経済史の有益な史料となりえようか。竺沙雅章氏によれば、

第二のものは「各年里長甲首」、第三は小黄冊である (漢籍紙背文書の研

究 京都大学文学部研究)。
紀要一四一九七三年

又 零本(存卷八六〇八八)至〔元〕通修 一冊

後補香色表紙(二七・一×一九・九チ)

卷首題「列伝孝感第七十四(隔格)魏書八十六」。この首葉

は南宋中期修葉で、刻工は金滋であるが、白口で魚尾がない。

刻工名は前掲本に準じる。

百衲本の底本や前掲本と同版であるが、原刻葉は皆無、南宋

中期修も稀で、大半が元修である。尾四葉に墨釘がめだが、

百衲本にはそれがない。もう一期、後修というべきか。

蔵印は「燕謀」、「寒雲／鑒賞／之珍」(円)「袍／存」(表克

文)。

中国古籍善本書目は、前掲本とこの本とを一括して、「宋刻

宋元通修公文紙印本 存十二卷」と着録する。

又 残本(存卷一三〇四九・一〇五〇一〇八) 至明

嘉靖一〇年通修

一六冊

後補香色表紙(三二・六×二二・九チ)

首題「皇后列伝第一(隔格)魏書十三」。左右双辺(二三・

三×一七・六チン、九行、一八字。この首葉は元修で、版心線黒口、題「魏書伝一」。

原刻葉はなく、南宋中期から元・明前期などを経て嘉靖一〇年の修に至る。

天象志第一の首に前上十志啓がある。

卷一六第一六葉は欠葉で、版心に嘉靖九年刊とする九行の初行上方に「欠一版／旧誤」と小字双行で刻された罫紙が挿入されている。

残四一巻は目録や標記の通りで、列伝第一〜三七と、志の巻次の数えかたで志第一〜一二に当るが、これが目録稿では通巻で卷一三〜六一と改変されている。前上十志啓に改丁しないで続く天象志第一も、「魏書第五十」とされている。

北齊書五〇卷 唐李百葉撰 〔南宋前期 浙〕刊〔南宋中期・元・明〕至嘉靖一〇年通修 六冊
後補標色表紙（三二・二×二一・一チン）。

北齊書目録に次で本文、巻首は「帝紀第一（隔六格）北齊書一／（低五格）隋太子通事舍人李百葉撰」。この葉は南宋中期修と思われ、左右双辺（二二・四×一七・八チン）、九行、一八字。

版心 白口、単黒魚尾、題「北齊帝紀一」。百衲本も同様であるが、上下象鼻の字数や刻工名が明修で削られたのであろう。補刊年記が嘉靖八・九・一〇年に及び、各代の刻工は宋書以下の各書に準じる。

前掲の南齊書一〇冊本と同印で、装訂が同じく、蔵書印もほとんど共通する。すなわち「海虞朝棟／莊仲宝蔵」、「李莊仲／圖書記」、「雲山一帶／閣李氏／蔵書」、「狎鷗／書屋」（陰）、「姚氏／友筠」、「姚／三」、「金林／珍藏」。

又（欠卷九〜一五・四〇〜四四） 至嘉靖一〇年 一二冊
通修

後補標色表紙（三二・四×二一・五チン）、襖装。第一冊の表に「宋本北齊書黃堯甫校」と墨書する。

補刊年記は嘉靖八・九・一〇年で、前掲本と同修。
卷三三第一〜九葉が補写で、卷一九第一葉は欠。
卷三三までには朱句点が打たれている。また、巻末の「列伝第四十二（隔三格）北齊書五十」の尾題の前後に、左のような朱書二則がある。

「此宋刊北齊書共五十卷隋太子通事舍人李百葉撰元修明／補每

頁九行行十八字已詳載各家書目不失宋刊面目而明補甚少仍可宝之内原佚列伝一至七卷又卅二至卅六卷余均完整古人為吉光片羽抱殘守欠曾同此意也復翁誌

「嘉慶丙寅冬病者五旬死社二次自問一切書籍此後非塵封蟻飾即覆醬甌入麴肆耳今幸獲安漸可至房外閑坐文字之緣不忽積手啓櫛偶檢乃此聊当卧遊以消永晝復翁又誌」

嘉慶丙寅（一八〇六）という年代からみて、蔵印がないが復翁は黄丕烈（一七六三—一八二五）か。

又 残本（存卷一—二五）至明嘉靖一〇年通修 四冊

後補香色表紙（三二・五×二二・九_チセ_ン）。明印の双郭の題簽「北齊書」が残り、前掲二部と同版であるが後印か。

周書零本（存卷四四（尾欠））唐令狐德棻等奉勅撰 〔南

宋前期 浙〕刊〔南宋中期・元〕通修 一冊

新補濃紫色表紙（三〇・八×二二・九_チセ_ン）、金鑲玉裝（紙高二五・八_チセ_ン）。

首題「列伝第三十六（_隔）周書四十四（_低）令狐 德棻（_{三格}）等撰」。首葉は元修であるが、左右双辺（二二・三×一

七・四_チセ_ン）、九行、一八字。版心 線黒口、単黒魚尾、題「周書列伝三十六」、刻工名は仲信。

全二〇葉の末一葉が欠、三葉が南宋中期修、一六葉が元修であり、原刻葉は存しない。南宋中期修工が朱春、李伸、金祖、元修工は仲信、朱長二、李昌、高文のほか単字。第一七葉（刻工金祖）は綴じそこねたのか、間に挿みこまれてある。欠画がみられない。

又 残本（存卷一—三五（欠尾））至明嘉靖一〇年通修 一二冊

後補暗藍色表紙（二七・二×二〇・二_チセ_ン）。襖装。襖紙には明刊九行の文章正宗が用いられている。

周書叙録存二葉半、第三葉の裏（本文三行）を欠く。周書目録。丁付は目録から叙録に続く。

本文卷首「紀第一（_隔）周書一（_低）令狐 德棻等撰」。左右双辺（二二・一×一七・六_チセ_ン）、九行、一八字。版心 白口、双黒魚尾、題「周書紀一」、上下象鼻に字数と刻工名。この葉は元修である。上象鼻にときに嘉靖八・九・一〇年の補刊年記がある。

原刻葉はなく、刻工が何建、沈仁拳、陳義らの南宋中期修葉がわずかに残るが、大半は元明修葉である。

卷三五第二六葉（本文・尾題各一行）を欠く。

隋書八五卷 唐魏徵等奉勅撰 元大德饒州路儒学刊本・

〔元後期〕覆饒州路本の混配 〔明〕通修（卷三四・三

五補写）

四八冊

後補薄茶色表紙（二七・九×一八・五^チ）、襖装。

隋書目錄。本文卷首は「帝紀第一（隔七格）隋書一／（低格）高

祖上（三格）特進臣魏 徵 上」。双辺（二一・五×一五・二

チ^セ）、一〇行、二二字。版心 線黒口、単黒魚尾、「隋帝紀一」

と題する。この首葉は原刻か。

以下の題は「志一 隋書六」「隋列一卷」など。修葉の版心

も線黒口が多いが、明初修は小黒口。上象鼻にはときに字数が

あり、また饒州路儒学刊本のごく一部に「堯学」（饒州路儒学）

「番洋」（鄱陽郡学）の文字が残る。下象鼻の刻工名は多くなく、

だいたい単字であるが、陶士中、士中、東虞とあるのは、元後

期の覆刻本のものである。

右によって両本の混配であることがわかるが、ともに明前期

の補刻があり、嘉靖修がないところから、その少し前の印本と推定される。

尾題「列伝五十（隔格）隋書八十五」のあと、一行おいて隋

書叙録、そして「天聖二年五月十一日上」から「内出版式雕造」

に続く。この間に卷二八第一六葉が鼠入するが、本文のその箇

所は別に補写されている。

補写は全二巻のほか、卷一〇第九・一二葉、二三一七四、二

八一―六一八、八三一二。

蔵印は「師竹／主人」（陰）、「徐乃／昌読」、「□□／呆坡／

家蔵」、「子と孫と／万年／永宝」。

同 元至順三年（一一三三二）瑞州路儒学刊〔明〕修

四八冊

後補金切箔散黒色表紙（二六・五×一七・四^チ）、襖装。

元の江西湖東道肅政廉訪使が至順三年に十七史（十史）の刊

行を計画し、瑞州路が隋書を担当した旨を記す周似周の序を欠

く。総目一葉と隋書目錄。

本文首題は次のように冒頭から一定せず、また紀・志・伝で

それぞれに異なる。「隋書卷之一／（低格）帝紀（隔格）特進臣魏

徵 上／^(三格)高祖」、「帝紀第二」^(低十格)隋書二／^(低八格)特進臣魏 徵上」、「隋書卷之三」^(二格)紀三^(隔五格)特進臣魏徵上」、「隋書卷之四^(隔五格)帝紀四」^(低八格)特進臣魏 徵上」、「隋書第六卷」^(低六格)監修國史趙國公長孫無忌等撰／^(二格)志第三十卷之一」^(三格)札義一」、「隋書三十六卷」^(低一格)特進臣魏 徵上／^(低一格)列伝第一」等。

左右双辺(二一・五×一三・九^チ・九^セ) 一部は四周双辺。九行、二二字。卷三の首葉は行一九字、卷四は二〇字、また卷六首葉は二一字、次に二〇字となる。版心 線黒口、稀に小黒口、双黒魚尾、題も「帝紀卷一 隋書」あるいは「隋書二卷 帝紀」のように大小題が上下に変化する。耳題を刻する。ときに下象鼻に刻工名があるが、その刻工名は山玉 少安 文夫 文曾 以安 以実 冲可 李洋 李祥夫 信中 庭桂 肅可とほかに単字の者が多数。明修葉には刻工名はない。

版木はかなり漫滅し、卷八三のあたりには上部または下部に亀裂ができ、数字分が欠けた葉が続く。欠葉が卷一第一五・一六葉、卷一八第一三葉、卷一九第一七・一八葉、卷三五第三五・三六葉、卷七七第三葉、卷八〇第八葉。

尾題「隋書八五卷終^(隔六格)列伝第五十」に続けて、「隋書

自開皇仁壽時」に始る五代史志跋二一行(注文小字双行)、天聖二年五月一日の上表と廉訪司の牒があるが、最後の列銜の一葉を欠く。

蔵印は蔣光燾の「塩官蔣／氏衍芬／草堂三世／蔵書印」「臣光／燾印」(陰)「寅／昉」。

この瑞州路本は旧故官博物院や北平図書館になく、すなわち台湾に現存せず、また日本にも存しないまま、古い目録ではほとんど饒州路本が瑞州路本と誤られていた。しかし、神田善一郎氏が孫毓修の中国雕板源流考に瑞州路本の周似周序があることを指摘され、ほぼ同じものが斯道文庫蔵の饒州路本の首に補写され、また九行二二字の瑞州路本の首半葉の書影が鉄琴銅鈕樓元本書影に、卷末の江西湖東路肅政廉訪司の列銜のところの書影が旧京書影に掲載されていることから、原本は未見ながら、前著ではようやく両本の区別がつけられた。その後、北京図書館で二部、そして上海図書館でこの三部を相次いで調査し、前者の一本に周似周の序のあることが確認された。ただし同館のもう一本(存首一五卷)については、上述のような一巻のうちに行格にいろいろ変化があることを知らず、王国維、張元濟両氏の解題に影響されて、前著に南宋刊九行本と誤認するという

大失態を演じた。このことは北京図書館蔵正史宋元版解題抄――

「正史宋元版の研究」補訂――（史学六四―三・四 一九九五年）

二六三頁以下、およびその中国語訳（北京図書館館刊一九九五年三―四）八〇頁以下に訂正してある。

なお北京図書館はさすがにもう三部を蔵し（一は存四〇巻、二は饒州路本の補配本、三は逆に饒州路本をもって補配）、天一閣文物保管所と安徽省図書館にも各一部があるという。

又〔明〕修（巻七九・八〇補写） 四八冊

後補薄青色表紙（二七・三×一七・六_チ）、金鑲玉装（紙高二四・三_チ）。

この本も序がなく、巻末の天聖二年の上表も列銜も欠く。

隋書目録は第一・二〇―二二葉（末）が補写である。本文も巻七九・八〇の全二巻のほか、巻八第一九葉、巻七七第二三葉、巻七八第二八葉、巻八四第二七・二八葉などが補写。巻八五（巻末）末葉の裏を欠くが、そこを飛ばして五代史跋だけが補写されている。

前掲本と同じく明代の補修が入っているが、この方がわずかに早印本である。

「梅華／草堂」印。

又〔明〕修（巻四四・四五・七一―七七補配明万曆二三年南京国子監刊本） 六四冊

後補金切箔散黄色表紙（二九・八×一七・八_チ）、襖装。ここにも序がなく、総目、目録から始る。巻末の五代史志跋二一行、天聖二年上表四行、江西湖東道肅政廉訪使等の列銜九行は完存。

明代前期に修補されている。刻工名は前掲本に同じ。

補配の九巻は列伝九・一〇・三六―四二で、九行一八字本。上象鼻に万曆二三年の刊記があるが、伝三六以下の七巻は下象鼻右半の監生の名のところを墨釘にする。南監二十一史の万曆版の一である。

蔵印は「胡印／惠孚」（陰）「邃／江」「曾在当湖／胡邃江家」「当湖小重山館／胡氏邃江珍藏」。

この本は中国古籍善本書目には著録されていないようである。

南史八〇巻 唐李延寿撰 元大徳一〇年（一三〇六）広徳路儒学刊〔明初〕嘉靖一・八・九・一〇年通修

(卷六三〇補配明万曆一十九年南京国子監刊本)

三三冊

後補香色表紙(三〇・八×一九・一_チセン)、金鑲玉装(料紙高さ二六_チセン)。

首の大徳丙午劄東寅の序は第三葉原欠。南史目録。

本文卷首「宋本紀上第一(隔八格)南史一/(低二格)李(三)延寿」。この葉は嘉靖一〇年修であるが、左右双辺(二七・一×一五・五_チセン)。一〇行、二二字。原刻の多くは四周双辺。版心もほとんど白口、双黒魚尾である。題は「帝紀(列伝)幾」。上象鼻に字数、下象鼻に刻工名のあることは少いが、嘉靖修葉に元・八・九・一〇年の補刊記がみえ、原刻の古杭占閏や張珍、明初修の張清之などの刻工名がわずかに残る。

明初覆刻本は多く三魚尾で、刻工名が顯著であるが、それがまだこの本の中にはみられないから、嘉靖一〇年の南京国子監二十一史成立時には、両版はまだ混配されていなかったことになる。混配本は北京大学図書館蔵本などにもあり、百衲本南史は無定見にも覆刻本を中心として逆に原刊本を補配している。

卷六一第三・四葉は欠けて、嘉靖八年補刊と刻する罫紙が補われているが、百衲本には原刻葉がある。他に卷六三第一葉が

欠。

全卷(卷八〇)の末葉は原刻と思われるが、版心下象鼻の「桐学儒生趙良棗謹書/自起手至閣筆凡十月」の二行は、もはや残っていない。

補配の万曆一七一九年南京国子監本には、版心上象鼻にその年記があり、各卷首に祭酒趙用賢、司業張一桂の官銜がある。張一桂はこの途中から祭酒に昇格している。補配本には、上海図書館以外の蔵印がない。

その蔵印は「延古堂李氏珍藏」(童文)、陰「積学齋徐乃昌蔵書」「南陵徐乃昌/校勘経籍記」。

同 「明初」覆大徳一〇年広徳路儒学刊本〔明〕修

(卷七七〇補配元広徳路儒学刊明通修本) 四一冊
後補金砂子散水色表紙(二二・九×一八・四_チセン)。櫛装。

大徳丙午(一〇年)劄東寅の序があるが、原欠の第三葉をとばして全三葉とする。南史目録。

明刊本にしてすでに卷一首葉は明のその後の修であるが、「宋本紀上第一(隔七格)南史一/(低二格)李 延寿」と題し、左右双辺(二一・一×一四・九_チセン)、一〇行、二二字。版心

粗黒口、双黒魚尾、題「南史帝紀一フ（丁付）」。原刻は線黒口であるがその残存は少く、大半は字様の劣る粗黒口の葉が占め、一巻すべてが明修の巻もある。つまり、覆刻本の版木はもとよほど脆弱なものであったようである。

また卷二三第二五・二六葉は原刊の広徳路儒学刊本で、一見して紙が古く、なんらかの事情で後に補われたものようである。

刻工名を左に表示する。原刻刻工は、明洪武ごろの福建寄りの方面で刊刻された諸書にしばしば見られる。

六彦 士達 子旻 子記 付彦 付資 汝敬 佰美 佛林
呉福 周寿 孟和 詹現 章毫 陸付 媿右 景舟 黄干
虞亮 虞擘 劉保 劉美 劉貫 羅六 (以上原刻)
付華 好九 林九 張孟 陸其 陸福 許六 劉清遠 (陰刻)
(以上補刻)

尾題「列伝第八十(隔八格)南史八十」。

補配の卷七七・八〇の四卷二冊は後補金砂子散乳白色表紙、

元大徳一〇年広徳路儒学の原刊、明修補本である。

蔵書印「恩福堂／蔵書印」(陰)、「世徳雀／環子と孫と／潔白」、「読易楼」、「楊昭和」、「海源閣」、「楊彦／合説／書印」

「楊氏海／原閣蔵」(陰)、「海原／閣蔵」「東郡楊氏／宋存書／室珍藏」(陰)、「宋存／書室」(陰)、「楊保彝／蔵書」「柳城／楊氏三世／守蔵」(方形の、中に円)、「傳印／増湘」(文)「江安傅／増湘沅／叔珍藏」「江安傅／沅叔收／蔵善本」「江安傅氏／蔵園鑑定／書籍之記」「雙鑑楼」「蔵／園」「傅沅叔蔵書記」「書／潜」「江安傅増／湘字沅叔／別号蔵園」、「江安傅／忠謨晋／生珍藏」(陰)「江安傅／氏洗心／室珍藏」「晋生／甘賞」(陰)「佩徳／齋」「忠謨／読書」(陰)「忠謨／繼鑑」(長子)。

北史一〇〇卷 唐李延寿撰 元大徳間信州路儒学刊(明)

修本と(「明初」)覆同本(「明」)修本との混配 四〇冊

後補薄茶色表紙(二六・九×一八・五センチ)、襷装。

北史目録。その尾に「周已千孫粹然 校正」の一行がある。

本文巻首は覆刻本の明修葉で、「魏本紀第一(隔六格)北史二、

左右双辺(二二・一×一一・四センチ)、一〇行、二二字。版心

粗黒口、双黒魚尾、「北史帝紀一上」のように題する。

このような覆刻の明修葉が過半を占め、さらに三割ほどがその覆刻本の原刻葉であるが、元信州路儒学刊の原刻葉も交り、版心に州学、(墨釘)路学刊、信州路学刊などの文字も残っている。

る。そして目録末葉と同様に卷五〇までには、「方洽周益 周

巳干 孫粹然 校正」「方洽周益 周之冕」「周益校正」などの各一行が卷末に刻される。

原刊本の刻工名はほとんどないが、覆刻本のもものは原刻が六彦、吳福、周寿 陳魯 魏名 黃子明 黃軒 劉傑 熊仏林 蔣仏 羅雄など、その明修刻工名は何好二 吳員 付華孫 林九 余延宗 荷好二 鄭文寿。

元信州路学刊明修本と明初覆刻明修本との混配本である。前者の版木が嘉靖八〇〇年の補修を経て、万曆一五五〇ころまでは南京国子監にあったのに、この本の中には嘉靖修葉がない。両者がいつ、なぜ、どこで混ぜられたのか、不明のところが多い。

卷一九第二〇葉、卷七九第六葉以下は欠葉。

清末の蔣光燾の「塩官蔣／氏衍芬／草堂三世／藏書印」「臣光／燾印」(陰)「寅／昉」印。

唐書二二五卷 唐書釈音二五卷 宋歐陽脩・宋祁奉勅撰

釈音宋董衡撰 元大徳一年(一二三〇七) 建康路儒学刊〔明初〕修 (卷二二五上下補配元天曆二年覆南

宋中期建刊本)

一二〇冊

後補黄土色表紙(ときに金切箔散)表紙(二八・六×一八・三センチ)、金鑲玉装(料紙高さ二六・六センチ)。

嘉祐五年曾公亮の進新唐書表、唐書目録上下。

「本紀第一(隔六格)唐書／翰林学士兼竜図閣学士朝散大夫給事中知制誥充史館修撰判秘閣臣歐陽脩奉 勅撰」。

左右双辺(二六・七×一四・九センチ)(しばしば四周をなぞる)、一〇行。二二字。版心 白口、双黒魚尾、「唐書卷二」と題し、上下象鼻に字数と刻工名を刻する。稀に双辺。補刻葉はほとんど粗黒口である。原刻刻工は台北中央図書館の北平蔵の四部からのものより、次のようにわずかに多く採取できた。

中成 王君粹 玉泉 仲文 李友生 沈昇 周昱 俞榮
姚徳昌 施恵 洪升 括蒼翁清隱 括蒼翁勝実 翁舜卿
朱徳明 陶桂岩 程元 葉祐 劉子明 徳昌 戴辰卿

(以上原刻)

王子智 王仏生 朱大存 朱禾 江厚 何敬 吳五 吳旦

呉睡 呉榮二 周東山 周春 季七 張伯灑 張克明

張清之 張広祖 章良之 趙川 趙伯川 戴添与

(以上元末明初修)

卷末に董衡の新唐書釈音序と唐書釈音二五卷。

欠葉が卷二二上第一五葉、四七一・二、八二一、一六三一
一七、一六五―一三・一四、一九七―一一等。

蔵印は「馬印／玉堂」(陰)「笏／齋」「漢唐齋」(陰)「扶風／書
隱／生」(陰)、「劉印／松南」(陰)「劉松／南印」「劉印／紹濂」
(陰)「紹濂／之章」(陰)「劉氏晚晴／閣收藏／圖書印」「五忠／
劉氏」(陰)。

補配の卷二二五上下は元天曆二年に南宋中期建安魏仲立宅刊
本を覆刻したもので、一〇行一九字本である(後掲)。

一方、この建康路儒学刊本は、南京国子監二十一史として明
末清初まで用いられたから、明通修の完本は多いが、無修の元
印本はごく少い。中国古籍善本書目を見ても、卷九二・九八、
二〇五・二〇六の零本四巻が北京図書館と人民大学図書館にあ
るだけで、纏った残本としては台北の中央図書館北平蔵の存一
六〇卷六六冊が唯一のものである。これに次ぐのがこの元末明
初修本で、同版同修本は同じ北平蔵に存一〇〇卷、存一二五卷
と二部存する。その存一二五卷本の首に大徳丁未(一二年)の
戚明瑞の序と建康路儒学教授趙由璋ら一名の列銜があるが、
この本もこれを欠く。

又〔明初〕・成化一八・弘治三年通修 一〇二冊

後補金切箔散薄水色表紙(二八・三×一七・六センチ)、襷装。

進新唐書表と唐書目録。

尾題「逆臣列伝等一百五十下」の次に、一行を隔てて「唐書
凡二百二十六篇総二百五十巻」以下の六行と、嘉祐五年の進呈
列銜(この弘治修葉は呈字を欠く)、送杭州鏤版の列銜がある。

版心下象鼻に監生河清、汪鑑、高安膠縉などと刻する葉が多
数あり、その上象鼻にはほとんど剝去の跡がある。ここに成化
一八年が大半と、一部に弘治三年の補刊年記があつたものであ
る。

「秀水朱／氏潛采／堂圖書」「南書／房旧／講官」(陰)(朱彝
孫・一六二九―一七〇九)、「宸澹遠堂」(文)(竜)、「金姚吳氏家蔵
書籍」(墨)等。

又 残本(存一九九卷 欠卷八八―一〇二・一三一)

一四一 至明弘治三年通修 一〇八冊

後補金砂子散黄土色表紙(二七×一七・七センチ)、襷装。

首に版心に唐書跋と題する大徳九年雲謙の序、進新唐書表、

嘉祐五年進呈列銜、杭州鏤版列銜を補写する。前々掲本の最後に触れた大徳一年の戚明瑞の刊序は管見の限りでは旧北平蔵の一本にしかなく、この雲謙跋が多くの南京国子監本に掲げられているために、中国古籍善本書目以下がほとんど本版を大徳九年刊と誤っている。続く唐書目録と首二葉は補写。

前本と同じように明成化一八年と弘治三年の補刊年記を剝去。その際の写校の監生の名も一部は除いたか。

補写が卷一第五・一〇・一一・一三・一四・一六葉、二一一・二、三二八・一一・一七、五一一・二、六一八・一七・一八、八一五・二二、一〇一七・一八、二二一三・四、二八上―一、二八下―一二・一三、二九一三〇・二五―二九、三〇下―三・五・一二、三二一―三―一七、四一―九・一〇、四四―二・一、四七―一・二・一七・一八・二〇、四八―三・一三、五一―三・四、六四―一八・一九、七上―一二・一三、七下―二七、七二上―九・一〇・一四、七五下―三一、八四―八・九、一〇六―一四―一八、一〇七―三、一〇八―七・八・一〇、一〇九―一・二、一一六―七、一二三―四、一二八―一四、一七三―一〇、一八五―六、二二四―一表・二六、二三五―一六裏・一七表・一八裏・一九、釈音一―一・四―五、一二―一・二と

多い。また釈音卷二五第二葉裏・第三葉表、五裏・六表が欠葉。

蔵印には難読のものが多く、「恩福堂／蔵書印」(陰)、「早歳／君王識／姓名」、「薩不図／□美寿」(陰)、「薩尔図／美訶公／寓目」[?]「訶／公／□」[?](上半陰)「三音／薩木／似□／英□」[?](下半陽)、「甘憐弓／兄果敢／主心血」、「桐華館」、「大司／歳印」(陰)。

卷七三下―七四下、二〇三―二〇五のあたりの刊記が切取られた葉は、前後に漫漶が進んでおり、紙質が白く異なるから、あるいは嘉靖修本が補配されているかもしれない。

又 残本(存一八二卷・釈音九卷 欠卷二〇―二二・三〇下―三三・五七尾・五九・六〇・六三―六六・七一上・七二下・七三下・七四上・七五上第一―一六葉・七五下・七七尾・八八―一〇〇・一六二―一六五・一六八・一六九・一九七・一八八・二〇〇・二二五上・釈音一―一六) 至明嘉靖一〇年通修 九九冊
後補金切箔散薄水色表紙(三〇・三×一四・一センチ)、襖装。
表紙破損の冊がかなりある。

進新唐書表、嘉祐五年の進呈と杭州鏤版の列銜、唐書目録。

ここでも版心上象鼻の補刊年記がすべて除去されているが、嘉靖八・九・一〇年の南京国子監での大補修まで行われていることが明らかである。嘉靖修葉が比較的新しく、その後まもなくの印本と思われる。

補写葉が少からずあるが、その丁付は略す。

「目耕／楼周氏／蔵書印」。

同 残本（存卷一―一五二） 元天曆二年（一三三九）

覆南宋中期建安魏仲立宅刊本〔明前期〕修 六七冊

後補青紫色表紙（二七×一六・二チン）、金鑲玉装（料紙高さ二三・八チン）。乾隆以後にこの大きさに裁断したらしく、巻頭の横川呉氏印の上部のところガ七ミリほども突出して切残されている。

曾公亮の進唐書表と唐書目錄上下。

「本紀第一（隔七格）唐書一／（低三格）翰林学士兼竜閣閣学士朝

散大夫給事中知制誥充／史館修撰判秘閣臣歐陽 脩 奉 勅撰」。

左右双辺（一九×一二・三チン）。一〇行、一九字。版心 白

口、双黒魚尾、題は「唐本紀（志・列）幾」、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名。巻一首葉に「己巳冬謙徳刊」とあるほかに、

王君粹、君美、程元、愛之、国寶などの名がある。かれらはまた至治二年（一三三二）刊の通志、泰定元年（一三三四）刊の文献通考、同四年前後の刊の十三経注疏、いわゆる興文署刊の資治通鑑なども刻しているから、謙徳の己巳は天曆二年（一三二九）と考えられる。少なくとも前半はなかなか優れた覆刻で、南宋中期建刊本の字様をよく残している。原刊本には「建安魏仲立宅刊行／收書賢士伏幸詳鑒」の双行末記がある。

補刻葉は版心が粗黒口で、特定の巻に集中し、その巻の大半に及ぶ反面、まったく修のない巻やごく少い巻も多い。下象尾に大垣市立図書館本にみられる明宣徳九・一〇年の補刊年記がないから、補刻は明前期に行われたものと思われる。

「横川呉／氏收藏／図書」（呉銓）、「三余齋／図書印」。

五代史記七四卷 宋歐陽脩撰 宋徐無党注 元大徳鉛山

州宗文書院刊〔明前期・中期〕通修（巻六―九・六

七―七四補写）

後補暗藍色表紙（二八・一×一七・八チン）。

陳師錫の五代史記序は補写。次で五代史記目錄。

本文巻首「五代史記巻第一／（低二格）歐陽（隔三格）脩

(隔格) 撰 / (低三格) 徐(三) 無党 注。

左右双辺(二一・一×一五・五_チセシ)、一部四周双辺。一〇行、二二字・注文小字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、題「五代史卷幾」、上象鼻の左右に字数、下象鼻に刻工名。刻工名は

一宗 人禾 子明 方午 王徳明 沈亨 季子 若虚 盛之
陳入 陶士亭(旬) 彭仁山 趙仁寿 ほかに単字。

これらの名の多くの上に、「宗」または「宗文」の二字が冠せられていて、宗、宗文だけの場合もかなりある。巻末の「五代史記卷七十四」の尾題の次行に、「宗文書院刊」と補写されている宗文書院の略号である。補写では断じにくいのが、北京図書館蔵の明初修本に、唯一この刊記が刻されているからである。このほかには内閣文庫蔵の至明中期通修本に、「崇文書院刊」の刻がある。そしてこの書院については、新編方輿勝覧卷一八江東路信州の学舎の項にみえる宗文書院が当ると思われる。

補写葉が多く、次のようにある。明中期修本のいくつかに刊記のあるべき末葉が欠または補写であるのは、ちょうどこの頃に南京国子監で版木の見直しが行われ、それが嘉靖二一〇年前後の大改修に至ったものと思われる。

序、目録第一二葉、卷二第一・二葉(以下二一一・二のよう

に書く)、三一一・二、五一三〇八、六全二一(葉)、七全六、八全八、九全七、一〇一三・四、一二一一・五・六、一四一三、一五一〇、二四一九、二八一五・六、三三一一〇、三五一一・七、三六一六、四六一五・六・一〇、四九一一一・三、四八一四・五、五二〇九、五三一二、五四一一、五六一五、五八一三・四・二三・二四・二九・三〇、六〇一六・一三・一四・一七・一八・二四、六二一一・五、六七全一〇、六八全一〇、六九全六、七〇全九、七一全六、七二全一六、七三全九、七四全一三。
旧蔵者の印はない。

又 至嘉靖一〇年通修

一六冊

後補濃紺色表紙(二九・八×一八・七_チセシ)、襖装。

五代史記序。五代史記目録、その末の「徐無党曰」は後の補刻である。

上象鼻は嘉靖八・九・一〇年の補刻刊記があり、卷七四末葉もそうで「宗文書院刊」の五字はない。前掲本のところで述べた通り、明中期の第一次の補刻まではそれがあり、嘉靖直前の内閣文庫本には「崇文書院刊」と刻されたのが、ともに嘉靖の

大改修ですべて消えたということのようである。

遼史一一六卷 元脱脱等奉勅撰〔明初〕覆元至正五年

江浙等处行中書省刊本(卷七一―七五補写) 三二冊

後補香色表紙(二八×一九・四_チセ_ン) 襖装。

首に「聖旨」に始る三葉、三史凡例、進遼史表、修史官員、遼史目録がある。

本文巻首「本紀第一(隔六格)遼史一/(低一格)開府儀同三司上柱

國録軍國重事中書右丞相監修國史領經筵事都總裁臣脱脱奉勅修」。

左右双辺(二二×一五_チセ_ン)。一〇行、二二三字。版心 小黒口、

双黒魚尾、題「遼紀(志・伝)幾」、下象鼻に刻工名。刻工名

は多いから略すが、前掲の南史、北史の明初覆元大徳九路儒学刊本のものなど共通し、同じく覆刻本であろうと考えられる。

ただし、原刊本はまったく現存しない。

末巻は国語解で、尾題は「国語解第四十六」。

ところどころに朱句点がある。巻七一―七十五は補写。

蔵印は「濮陽李廷相雙/檜室書画私印」(二四八―一五四

四)、「武林高氏瑞/南莊書画記」(高濂・万曆初年まで在世)、

「豫園/主人」(陰)(潘允端・一五二六―一六〇一)、「何焯/私

印」(二六六一―一七三三)、「黄/丕烈」(陰)「堯/翁」(一七六三―一八五二)、「汪印/士鐘」、「顧印/黄斤」(陰)、「□□/清暇」印がある。

なお、中国古籍善本書目は上海図書館蔵(蔵書単位代号〇二〇一)として、右のほかには次の六書を著録する。(最下段の数字は書名番号)

史記存一一三卷(卷二―六・一五・四三・四七・四八・五四)

一三〇) 集解索隱二注本 宋乾道七年蔡夢弼東塾刊(内二

〇卷補配蒙古中統二年段子成刊本) 明許初跋 五三

後漢書存一〇卷(卷一―一〇) 宋紹興江南東路轉運司刊元明

通修 傅增湘跋 四五三

三國志存一六卷(魏志一―一六) 宋刊元明通修 蔣祖詒跋

五五八

晉書一三〇卷 元刊明修(一〇行一九字本か) 六四六

同一三〇卷音義三卷 元刊明正徳一〇年司札監嘉靖万曆南京国

子監通修(一〇行二〇字本) 六五一

隋書存一卷(卷一一) 宋刊 七四四

上海図書館蔵の宋元版の調査は、現在までのところ、一九八七年初夏から四年おきに三次に亘って行われ、ようやく史部の正史・編年類を了えた。

初の二回は顧廷龍名誉館長が親しく引見され、ご教示を賜ったり、館前の人民飯店でご馳走に預ったりした。その第二次の数日め、先生がガン性の病を得て北京へ飛んで手術されたと聞かされ、たしか九〇歳であられることとて案じられたが、恢復されてすでに五年、いまでもご健在の由で、その生命力に敬服している。この稿の校正中には、顧頡剛氏と合輯の尚書文字合編（上海古籍出版社刊 一九九六年）を恵贈され、その受領について同社を通じて二度も連絡をいただいた。善本特蔵部主任の任光亮氏と陳先行氏は常に厚意をもって応待され、張善信氏と共に限られた時間での閲覧調査に格別の便宜を計ってくださった。

顧先生には復旦大学古籍整理研究所長の章培恒教授に特別にご紹介いただいた。章先生は一九七六年ごろ神戸大学に講師であられたが、その一日、聊齋志異関係の資料閲覧のため慶応義塾を訪ねられた。その際、私は応待したというより立会っただけであったが、それだけの縁で先生は私の調査活動

を、北京・南京におけるものまで、万事きめこまかく按排してくださった。邵毅平氏をはじめ、同研究所所員の各氏も、常に協力を惜しまれなかった。

このような上海のみなさんのご厚意、ご尽力に深く感謝を申上げる。